

※研究動態※

辜鴻銘來臺相關報導彙編

林慶彰*編 藤井倫明**譯

辜鴻銘(1857-1928)是清末民初的大儒。他曾留學英國、德國，精通多國語言，對德國和日本的思想，也有相當的影響。可惜，下苦功研究他的學者並不多。不但他在德國留學的情況，相當模糊，即民國十三年(1924)底來臺灣講演，大多數學者所編辜鴻銘年表，也都語焉不詳。如：黃興濤著《文化怪傑辜鴻銘》(北京：中華書局，1995年5月)，頁三七五，在一九二四年辜鴻銘六十八歲欄下說：「年底，應辜顯榮之邀到臺灣講學，旋回國。」孔慶茂著《辜鴻銘評傳》(南昌：百花洲文藝出版社，1996年12月)頁二三六，一九二四年欄下說：「十一月十六日，應族弟，臺灣實業家辜顯榮之邀，由日本赴臺灣作短期演講。」姜克著《學貫中西，驚世奇才——辜鴻銘傳》(合肥：安徽文藝出版社，1997年11月)，頁二五五，一九二四年欄下說：「年底應辜顯榮之邀到臺灣各地講演孔子學說。」這些記載，不但過於簡略，且時間也有錯誤。可見這些研究辜鴻銘的學者，都沒有對辜氏在臺的活動作過較深入的研究。

一九九四年年底起，筆者開始有編輯《日據時期臺灣儒學參考文獻》的構想，發現各報刊中有不少辜鴻銘來臺訪問的報導，二〇〇〇年初起，遂根據五南圖書公司影印的《臺灣日日新報》逐日檢閱，加上《臺灣民報》、《臺灣詩薈》之評論，中、日文合計達數十則之多。這些都是以前研究辜鴻銘之學者從未引用的資料。由於五南圖書公司影印之《臺灣日日新報》模糊不清，乃請蕭開元學弟再到國家圖書館臺灣分館重印一次。將所得之資料，按時間先後編排完畢，乃請臺北市立師範學院應用語文研究所顏素足學弟輸入電腦，並作初步校對，再請正在中央研究院中國

* 林慶彰，中央研究院中國文哲研究所研究員。

** 藤井倫明，日本九州大學文學部博士候選人，中央研究院中國文哲研究所訪問學員。

文哲所作為期一年之訪問的九州大學文學部博士候選人藤井倫明先生作進一步校對，並將其中的日文報導譯為中文。筆者再作最後校訂。此事起始於二〇〇〇年初，至二〇〇一年九月才全部完成，計花費二十一個月之時間。執行此事之困難，於此可見。

有關辜鴻銘來臺之報導資料，本文未收者可能還有不少，希望海內外先進能賜予指導。二〇〇一年九月林慶彰謹誌。

大正十三年十一月十九日

刊載辜鴻銘照片一幀。旁有標題「近く來臺する支那碩儒辜鴻銘氏」。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕11 月 19 日）

大正十三年十一月十九日

碩儒辜鴻銘氏二十二日扶桑丸にて來臺

去年十四日入京以來各地で講演していた支那の碩儒辜鴻銘先生は，本島の辜顯榮氏の招きにより二十二日の便船で，東中將を同伴來臺することになった。先生の把持する主義、主張に就ては今日まで幾多の新聞紙で紹介されているから餘り知られていない點を左に掲げる。

辜鴻銘先生は支那官紳録にないで有名な碩學大儒である。そして又民國も既に十三年にならうとしているのに未だに辮髪を蓄はへて置ける老先生で，而も英語の流暢なものと云つたら，來朝以來各所の

講演は凡て英語で

やつてのける英學者である。先生の辮髪は過去英國留學中にはかなり面白い挿話を作っている。先生は今でこそ辮髪はあるが，英國にいた頃或る宿屋でベナンから來た儘で髪を延ばしていて男子用の便所へ行かうとしていると，女中がそこは女子のではないと，辮髪あるが爲め女のコに見られたのですつかり

憤慨し早速髪を剪

つたと云ふことがある。この英國留學は，彼がベナンに生れ十八年をそこに

送つた春のことで、同地にいたスコットと云ふ英人に伴はれて英國に留學したのであつた。先生の英文學に造詣の深いことは、彼のタゴール氏が英文の詩でノーベル賞金を勝ち得た程ではないが、先生は支那思想を最も巧みに英語に翻譯する。又時としては漢字の示す思想よりもより深遠にして含蓄ある英文となる。

先生の持つ長所は

實に其處にある。支那の國字の孔子、論語をよむより先生の英文の夫れを読む方が孔子の新生命に觸れる氣がして且面白く讀まれると云はれている。先生英文著書としてかなり知られているものに尊王篇、春秋大義、オックスホード・イン・チャイナ等あるが、其内比較的日本に知られて居り且最も先生の日本觀を盡しているものは、曾て支那の外字紙に寄書した

日本の將來の一篇

である。先生が如何に日本に對して理解を持つているかが窺ひ知られる。別項に其一篇の拔萃を掲げる。先生は日本の嘆美者であり且親友である。その我國を愛し我國の文明を嘆美するに至つた所以はすでに世間に知られている如く廣東の日本の一酒樓に賣られて來た一少女を救つて自分の妻としたことに因縁している。(△生)(《臺灣日日新報》，大正13年〔1924〕11月20日)

〔譯文〕

大正十三年十一月十九日

碩儒辜鴻銘博士，二十二日，乘扶桑丸來臺灣

從上個月十四日到東京以後，便在各地演講的中國大陸之碩儒辜鴻銘博士，應辜顯榮先生的邀請，決定於二十二日坐船偕同東中將來臺灣。關於博士所堅持之主義、主張，在許多的報紙上已經有介紹，所以後文將說明其從來不為人知的事情。

辜鴻銘博士，雖然在《支那官紳錄》上沒有記載其名，不過他是很有名的碩學大儒。儘管現在已經是民國十三年，但他還把辮髮留了下來。他的英文非常好，流利得在什麼地方演講都用英文。他就是這樣的英文學者。

關於博士的辮髮，在英國留學中有一個很有意思的插曲。博士在英國念書的時

候，有一天他在一家旅館要去如廁的時候，女服務生說：「這裏不是女用的」。因為博士有辮髮，所以她以為博士應該是女生。博士非常氣憤，立刻把頭髮剪掉了。博士在檳榔嶼出生，十八歲的春天，跟隨一位逗留在檳榔嶼叫作「Scot」的英國人到英國留學。博士對英國文學的造詣很深，雖然不及那位泰戈爾用英文寫詩獲得諾貝爾獎，不過博士也把中國思想巧妙地譯成英文。博士翻譯出來的英文，有時比用漢字原本本來所表現的思想更有含意，這正是博士的優點。聽說讀博士翻譯的英文《論語》，反而比讀漢文《論語》更能感覺到孔子的新生命，而且更有意思。

博士用英文寫的著作中，相當有名的就是《尊王篇》、《春秋大義》、《Oxford in China》等等。在日本比較有名而且最能呈現博士之日本觀的，就是曾經向中國的外國報紙投稿的一篇《日本的將來》。看這篇文章就可以知道博士非常了解日本。本社將會把這一篇另外摘錄於別處。他是一個讚嘆日本者，而且是日本的朋友。他所以會愛日本，讚嘆日本的原因就如眾所皆知的，是跟他救了一位被賣到廣東一家日本酒樓來的一個日本少女，而且還跟這個少女結了婚有關係。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕11 月 20 日）

大正十三年十一月二十三日

刊載辜鴻銘照片一張。旁有標題「けふ來臺した辜鴻銘氏。」（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕11 月 23 日）

大正十三年十一月二十四日

漢洋學の大家、辜鴻銘氏略歴(一)

督府外事課某氏談

支那現代第一流の

思想家論客として知られ、海外にはクウ・ハン・ミン先生として敬服されて居る辜鴻銘氏は、曩に朝鮮を経て憧れの日本を訪問し、上下の歓迎を受け、各地に講演を爲し、名聲一時に揚つた感があるが、本二十二日大東文化協會の東中將同行扶桑丸にて渡臺された。本島に於ては同氏の事に關し知らんとする人も多數あると思料するから、私共の讀み且聞きたる處により其經歷、人物、主張等の概略を紹介したいと思ひます。辜鴻銘氏祖先の發祥地は我が

對岸福建省であつて其父母は南洋なる海峽植民地彼南に移住せる華僑である

が、梅檀は二葉より香しと云ふ古語の通り、氏は幼にして穎悟夙に神童の稱があつたさうである。氏十三歳の時有名なる小説家スコットの同族にして偶偶在彼せる蘇國人ボルグス・スコット氏に其偉才と將來を囑望され、伴はれて渡英し、直ちに同地のグランマー・スクールに入學し、後エデنبロー大學に入つた。氏は絶倫なる天分に加ふるに拮据勉勵したるを以て優等の成績を以て同大學を卒業し、更に轉じて

獨逸柏林に行き、同地ポリテヒニツジユ・シユレーに入學した。斯間歐洲各國を歴遊し、學成り業卒つて祖國に歸來したのは二十六歳の時である。在外中該博深遠なる泰西の學問を修得して歸國した彼は、支那固有の漢文學を學習し、漸く祖國の事情を知悉するや、上海マーキュリー紙の記者となつて椽大の筆を揮ひ、支那に關する事項の英譯に従事したのである。此間に當時の湖廣總督張之洞に知られ一躍其秘書官に舉用された。日清戰爭當時は唐紹儀と共に上海に派遣されて外債募集の任務を擔當し、張之洞軍機大臣に昇進北上するや氏も亦張に隨伴し郎中となつた。

義和團事件以來革命思想の勃興するに當つて氏の如き漢洋學に通ぜる人は少からず重寶がられたさうである。其後上海に黃浦江浚渫局の設立さるるや、支那政府の代表として該事務を管理せるが偶偶外人技師と意見の衝突を來して職を辭し、上海南洋公學の教授となつた。我が明治四十四年即ち辛亥の革命武漢の地に勃發するや、辜氏は敢然として清朝維持を高唱し、君主立憲制を主張して憚からざりしが、此時共和政體の氣分四方に磅礴し學生の反感漸く熾烈となり、李鴻章、袁世凱等の

北洋閥の下に其の扶持を得る事を潔しとせず、主義の爲めに殉して氏の誇りとする所謂浪人の身となつたのである。其後或は北京大學に英文學の教授を擔當し、或は塙國公使館の事に當り、或は支那各地の英字新聞に論文を投書し、最近にはノース・チャイナ・スタンダード及び上海の一二新聞に寄書し又は著述を爲し、主として清貧なる記者生活を送り、世を警め人を訓へ來つたさうである。氏は拉典、希臘、希伯來等

古典に精通し、英佛獨伊の各國語に堪能である。殊に多年英國流の教育を受けた爲め英國現代の文明を築き上げた科學文明に就て深き理解あり、英人の思想感情の表現である英文學には造詣最も深く、既に一個の權威と推稱され、英文家

としては蓋し東洋隨一で英米人と雖も氏と比肩し得るものは少數ならんとの事である。氏の文章は雄渾莊重、識見卓拔、ユーモアと諷刺に當み引證該博である。常に西洋の大思想家大哲學者大詩人等の議論學說名句を縱橫自在に引用して其

論旨を徹底せしめ、讀者を説伏せずんは措かざるの概がある。其の筆力の雄健たるには我々の知れる記者も舌を巻いて激賞して居つた。外國人でも論戰に於て氏に向つて太刀打出来ないさうである。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕11 月 24 日）

〔譯文〕

大正十三年十一月二十四日

漢洋學的權威・辜鴻銘博士略歷(一)

督府外事課某先生談

以現代中國第一流的思想家、論客聞名，外國人稱 Gu-Hong-ming，受到大家尊敬的辜鴻銘博士，曾經過朝鮮而後訪問他憧憬的日本，受到大家的歡迎，並在各地演講，他的名聲一時好像更形高揚。博士已經於二十二日偕同大東文化協會的東中將，乘坐扶桑丸來臺灣。我覺得本島（臺灣）的很多人都希望能知道關於博士的事情，所以我要把他的履歷、爲人、主張等等的概略，依據我們所讀到的和聽到的，介紹一下。

辜鴻銘博士的祖先是臺灣對岸的福建省人，他的父母是移民南洋海峽殖民地彼南的華僑。誠如所謂「梅檀從發芽時便很香」這句古語所比喻的：偉人自小就不平凡的一樣，博士從小時候便很聰明，被稱爲神童。博士十三歲的時候，與當時很有名的小說家 Scot 同族的蘇格蘭人 Volks Scot，偶爾剛好住在檳榔嶼，認識了博士。Scot 賞識辜少年的偉才而對其將來寄予厚望。結果辜少年跟隨 Volks Scot 到英國去，立刻上了 grammar school，然後考上愛丁堡大學。由於他不但有無比的天賦，而且還拚命努力念書，所以以優秀的成績畢了業。畢業以後便去德國柏林，再上那裏的 Polytechnische Schule。在德國逗留的時候遍訪歐洲各國，學業完成後，便於二十六歲時返回祖國。他學會賅博深遠的泰西的學問，回國以後學習中國固有的漢學，漸漸熟悉祖國的事情。爾後當上了上海 Mercury 報社的記者，發揮才能，把關於中國的消息翻成英文。這個時候，當時的湖廣總督張之洞認識他，一下子便起用他爲秘書官。中日戰爭的時候，他跟唐紹儀被派遣到上海去，擔

負招募外債的任務。當張之洞晉升為軍機大臣北上的時候，他也被任命為郎中，跟隨張之洞北上。

義和團事件以後，隨著革命思想的興起，像辜博士這樣熟悉漢洋兩學的人很受到歡迎。其後淞滬局在上海黃浦江設立，他代表中國政府管理事務。但不料卻與外國技師意見不合，遂辭職，轉任上海南洋公學的教授。

當明治四十四年，在武漢發生辛亥革命的時候，辜博士毅然提倡維護清朝，毫無顧忌地主張立憲君主制。可是那時候共和政體的氣勢磅礴，廣及四方，對於立憲君主制，學生的反感也越來越激烈。所以辜博士不肯依靠李鴻章、袁世凱等的北洋軍閥來扶持清朝，為了堅持自己的主義，辭去教授之身分成為無職業者。之後，有時在北京大學教英文，有時向中國各地的報紙投稿。最近向 North China Standard 以及上海的一兩家報社投稿；或者著書，安於清貧的記者生活，警世訓化人民。辜博士通曉拉丁、希臘、希伯來等語所寫成的古典，長於英、法、德、義等各國語言。因為他多年來受英國式的教育，所以特別熟悉構成現代英國文明的科學文明，對英國人表現感情的英文文學造詣最深，已經被認為是一位英文文學的權威。關於英文文學，他大概是東方首屈一指的人，據說英國人或美國人也無法與之匹敵。他的文章雄渾莊重、識見卓拔，富於幽默和諷刺，且引證亦相當賅博。常常自由自在地引用西方的大思想家、大哲學者、大詩人的議論、學說、名句，而且把論旨理解得相當透徹，有如果不能說服讀者的話，就不肯停筆的氣魄。有的記者看到他雄健的筆力，讚嘆不已。聽說外國人也跟他論戰而不能獲勝。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕11 月 24 日）

大正十三年十一月二十五日

漢洋學の大家、辜鴻銘氏略歴(二)

督府外事課某氏談

臨城事件の際

米人と論戦して之を僻易させたのも有名な話しである。現今支那にも日本にも東西の學術文明を相當研究し理解して居る學者はあるけれ共、徹底的に東西の文明を咀嚼し世界的の思想家、文章家として是が長所短所を比較對照して堂堂と歐米人の前に論述し得るを確信あり識見あり勇氣ある學者は甚だ鬱鬱ない。外人が氏の人格を評して支那人でもなく歐洲人でもなく

世界的の人であると云うて居るさうであるが一理ある説である。氏の議論主張が頗る奇抜で時流を超越して居る爲めに俗人や泰西文明一點張の學徒からは氏を奇人扱ひにし、又は時代遅れの拗くれ者だと貶す人もあるさうである。氏は清議を以て新聞記者の任務となし、凡そ記者たるものは自己の最善なりと信ずることを書き、決して報酬を目的にして働くべきでない。須らく

新聞記者は現代の托鉢僧たるべしと主張して居るさうである。氏の著書、氏は記者たるの傍著述、翻譯に従事し居れば著書も數篇ある。最も有名なるは尊王篇、春秋大義、オックスフォード・インチャイナ等である。尊王篇は氏が張之洞の幕僚として廣東に在りし際、長髮賊平定の功勞者彭國爵が病褥に在りし間、西太后より

幾度か藥餌品の下賜あり、其都度彭が感泣せることを聞き、深く感奮せるの餘り筆にせるものなりと云ふ。同書は今私も繙きつつあるが實に立派な英文で希臘、拉丁、英、獨、佛等の詩人哲學者及古代支那大家の書より名文を該博に引證しあるには驚くばかりである。其他《論語》、《大學》、《中庸》の英譯もあり東洋思想を歐米の學者に紹介するに與りて力ありたりと云ふ。

辜氏の名は獨逸に於て殊に評判高く、ゲツチンゲン大學に於ては大に推贊されたさうである。漢文の著述としては《張文襄公幕府記》二冊あり、詩作も達者なさうである。然して支那のバーナード・ショーと言はれ、又印度の詩聖タゴール翁と共に亞細亞哲學者の雙璧と稱せらるる碩學鴻儒たる辜氏の思想蘊蓄に付ては、我々の如き淺學菲才のものでは是を窺知忖度することは到底不可能であるが

同氏の講演及び内外新聞の記事を參酌綜合して其一斑を紹介したいと思ふ。先づ私の見る處を以てすれば、氏が今日の如き強烈なる思想家、精神家になつたのには數多の原因があると想はる。第一は氏が多年外國に在りて泰西の歴史、文明を研覈して其真相と缺點とを看破したること、第二は歸國後始めて

祖國の學問思想を研究し且つ孔孟の衣鉢を傳ふる大政治家、大學者である張之洞に私淑して大なる感化を受けて東洋文明の長所を認識したことである。第三には支那の制度の適當にして清朝君主の信厚優渥なるに感激したること、第四は氏が其の夫人たりし貞淑にして而も武士的氣節ありし日本婦人より能く日本の歴史、國民道德を理解し

日本の精神文明の憧憬者となつたことである。第五には現代祖國の同胞が崇

高にして善美なる固有の精神文明あるを知らずして、徒に泰西の物質文明に心酔し濫りに彼の制度を模倣し、爲に國運を危殆に瀕せしめたるに憤慨したること等である。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕11 月 25 日）

〔譯文〕

大正十三年十一月二十五日

漢洋學的巨匠・辜鴻銘博士略歷(二)

督府外事課某先生談

臨城事件的時候，辜博士跟美國人展開論戰，使美國人屈服，這也是很有名的美談。現在在中國或是在日本也有很精通東、西方學術文明的學者，可是能像辜博士那樣地徹底體會東西兩文明，酌量其優點與缺點，能威風凜凜地向歐美人侃侃而談的世界性思想家、文章家則很少。聽說外國人不認爲辜博士是中國人，也不將他視爲歐洲人，就把他當成是世界性的人，我覺得真有道理。因爲他的議論、主張頗爲新穎，超越時代的潮流，所以世俗之人或是崇拜西方文明的學者，有人把他當做是古怪的人，有的則貶低他，說他只不過是落後於時代的乖僻之人。辜博士則主張說道：作爲新聞記者，應該以清議爲任務，寫自己所信以爲最善之事，絕對不可爲了報酬而工作。新聞記者須成爲現代的托鉢僧侶。他一邊當記者，一邊從事著述和翻譯，所以他著有幾篇著作。最有名的是《尊王篇》、《春秋大義》、*Oxford in China* 等等。《尊王篇》的成書緣由如下：平定長髮賊有功的彭國霖臥病在床的時候，西太后屢次賜給彭國霖藥品和食物，彭國霖每次都感激涕零。辜博士在廣東當張之洞的幕僚的時候，聽到這個故事深受感動，而寫成了《尊王篇》。我在翻閱這本書時，就發現博士用卓越美麗的英文寫成此書，而且賅博地引用希臘、拉丁、英國、德國、法國等國的詩人、哲學者，以及中國古代的巨匠們的名文，真是令人很佩服。還有他把《論語》、《大學》、《中庸》譯成英文，在將東方思想介紹給歐美學者上，有很大的助益。

辜博士在德國的評價特別好，聽說他在 Göttingen 大學教書的時候，獲得非常高的讚譽。關於他用漢文寫的著述，有《張文襄公幕府記》二冊，據說他作詩也很拿手。

關於被稱爲是中國的蕭伯納，或是與印度詩聖泰戈爾同被稱爲亞洲哲學雙璧的碩學鴻儒——辜博士，雖然淺學菲才如我，無法窺測忖度博士的思想、造詣，但是現在

且依據他的演講，以及內外報紙的消息，酌量概括他的思想學問，介紹其中的一部分。

博士所以變成如現在這樣強烈的思想家、精神家，原因有許多：

第一、他多年在外國研覈西方的歷史、文明，看透其真相及缺點。

第二、回中國以後，博士才開始研究祖國的學問、思想，而且以繼承孔孟衣鉢的大政治家、大學者張之洞為師，受到很大的感化，結果由此而理解東洋文明的優點。

第三、他認為中國的制度非常適當，而且為清朝君主的重情義所感動。

第四、他透過他的夫人，即貞淑而且有武士氣節的日本婦人，了解到日本的歷史和日本的道德，結果成為憧憬日本精神、文明的人。

第五、關於現在祖國的同胞不知道本國本來有崇高而且美善的精神文明，徒然醉心於西洋物質文明，且胡亂模倣西洋的制度，結果讓國運瀕臨危殆。博士對此感到憤慨。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕11 月 25 日）

大正十三年十一月二十六日

漢洋學の大家、辜鴻銘氏略歴(三)

督府外事課某氏談

以上數節より想察さるる通り氏の思想は

保守主義で今日流行せる民主主義共和政治、物質文明等には調和せざるものである。過去數千年間に於ける泰西の文明殊に其物質機械の利用に於ける文明の發達は燦然として驚異すべきものがある。而て物質文明の大潮流が澎湃として汎濫したるが爲め、精神道德の文明は此逆浪に壓倒されて殆ど其力を潛めるの餘儀なきに至つた。此大勢に對しては歐洲諸國の宗教家、教育家、識者懸命の努力も其甲斐なく物質主義、軍國主義彌彌勃興，遂に囊の

世界大戰を惹起し，數百萬の人命と莫大なる財寶と破壊し去り，折角過去數世紀を費して築き上げた文明を一朝にして瓦解した。此慘劇なる體驗より覺醒した關係諸國は，國際聯盟や華盛頓會議や其他の會議や協約に依りて，外、國際的協和を維持し内國民生活の安定を得んとして努力しつつある様であるが，仲仲恆久的の平和を招來すべき根本的の解決法が見出し得ない様である。翻て日本の現狀を看れば寔に寒心に堪へざるものがある。我國が一度泰西諸國と通商交際を開

くや何等の理性批判なく模倣的器械的に

泰西の文明を輸入し、過去半世紀間に於ては殆んど是を攝收し普及するに成功した。然るに盲目的に之に陶醉した結果は獨り表現形體に止まらず、精神生活に進入し來つたのである。斯くして今や我我は政治生活、社會生活、個人生活の上にも非常なる危険期に直面しつつあるのである。目下日本の爲政者教育家宗教家識者等は如何にして時代の思潮を取扱ひ國民の生活を善導すべきかに焦慮して居るのであるが、私共の見る處では日本獨特の忠孝主義の根本道德を振起し又數千年來東洋

文化の源泉となりて我が國民族精神を醇化し、國體と融洽し來つた支那古代の道德倫理の教、印度傳來の哲學宗教の思想を正解咀嚼し、是に配劑するに歐米文明の美點長所を擇り、以て東西融合の新文明新道德を建設大成し、獨り自國民を救ふのみならず進んで世界の文明に貢獻し、人類同胞の平和と幸福に寄與せなければならぬと思ひます。之れ我我國民の高尙なる理想と信ずるのであります。聞く處に據れば歐米諸國に於て理想主義韓圖哲學主義が漸く抬頭し來り、

歐洲古文明の精神を普及して國民の理想を高尙に導かんとするの主張が起り、從て學者思想家間に東洋の思想支那古來の文明に著目し研究せんとする者續出しつつあるさうである。此時に方り東西の文明に精通し東洋固有の文明道德を高唱しつつある辜氏が思想上混亂の巷に徬徨しつつある日本國民に對して獅子吼的講演をさるるは大に意義ありと想はる。辜氏の日本人に對する希望一言にして蔽へば徒に泰西の文明に心酔せず東洋文明の眞諦を發輝し活用せよ。又

支那文明の復興は日本人の天職であるとの趣旨である様である。内外の新聞雜誌に由るに辜氏の主張思想に對しては種種の批評或は反對論もある様であるが、併し同氏の眞意のある處を諒解せば蓋し得る處亦大なるものあらんと思はるのである。(完)(《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕11 月 26 日)

〔譯文〕

大正十三年十一月二十六日

漢洋學的巨匠・辜鴻銘博士略歷(三)

督府外事課某先生談

如從上述的幾節便可看得出來的，他的思想就是保守主義，和現在流行的民主

主義共和政治、物質文明等等並不協調。過去數千年間，西方的文明，尤其是利用物質機械發達的文明，相當璀璨耀眼，真可以令人驚嘆不已。但是因為物質文明的大潮流澎湃地泛濫，所以精神道德文明被此逆浪凌駕，導致產生了其力量幾乎隱藏無遺之情況。對此大勢，歐洲諸國的宗教家、教育家、有識之士雖拚命努力，卻也沒有用。物質主義、軍國主義越來越興盛，結果終於導致上次的世界大戰，殘害了數百萬的人民，以及破壞掉巨大的財富。於是花費了過去數世紀，特地建立的文明，轉瞬間就崩潰了。醒悟此悲慘的體驗，各國拚命地依靠國際聯盟、華盛頓會議或其他的會議、協約，在國外希望維持國際的諧和，而在國內則希望得到國民生活的安定。然而卻好像不容易找到可以帶來永久性和平之根本解決方式的樣子。反過來看，日本的現況，真不得不叫人打起寒顫。我國一開始跟泰西各國通商，就沒有任何理性的批判，模倣地、機械地進口泰西的文明，過去半世紀之中，算得上是幾乎成功地吸收了泰西文明，並加以普及。

然而盲目地陶醉於西方文明的結果，只注重外表的物質生活，至於精神生活則被破壞。於是現在我們在政治生活、社會生活、個人生活上，都面對了非常危險的情況。目前，日本的執政者、教育者、宗教家、有識之士等正在苦心思索該怎麼應對時代思潮，妥善引導國民生活。我覺得應該振興日本特有的根本道德，即忠孝主義，另外，首先要把幾千年來做為東方文化之根源，醇化我國之民族精神，而且和我國體相融合的，中國古代的倫理道德，以及從印度傳來的哲學、宗教好好地加以理解，然後，採取歐美文明的優點，建設融合東西的新文明、新道德，不但救濟本國人，而且應該主動地對世界文明及人類和平和幸福做出貢獻。我堅信這就是我們國民高尚的理想。據說在歐美各國，康德哲學主義漸漸抬頭，興起了主張推廣歐洲古代文明的精神、提高國民的理想，因此關注並希望研究東方思想、中國古代文明的學者也越來越多。當此之時，精通東西文明，而且高聲提倡東方有其特有的文明道德的辜博士，便在思想混亂的社會，對徬徨的日本國民舉行演講而大聲疾呼，這真是有意義的事情。辜博士對日本人的要求，一言以蔽之，就是不要一直醉心於泰西文明，要發揮東洋文明之根本意義，並實際應用之。又，復興中國文明一事就是日本人的神聖職責。

雖然內外的報紙、雜誌，對辜老師的思想、意見有種種的批判，也有持反對意見的。但是如果我們能諒解他的本意的話，一定會對我們非常有益。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕11 月 26 日）

大正十三年十一月二十六日

辜氏訪問督府

辜鴻銘氏，二十四日午前十時，訪問總督府，由法水外事課長案內與後藤總務長官面會，于府內一覽後，十一時辭去。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕11 月 26 日）

大正十三年十一月二十六日

官民公宴辜東兩氏

臺北市及附近官民有志，既如所報，去二十四日午後六時起，假梅屋敷，爲辜博士（鴻銘）、東中將（乙彥），大開歡迎會。豫會者，後藤長官，暨督府各部局長，各官衙學校長，民間名士，凡九十餘名。賓主席定。高田知事。代表發起人敘禮。先謝其以賅博之見識炯眼之觀察，對我國民，批評教訓，在在有益，而後謂「日」華兩國，爲其文明，遜泰西諸國一籌，故汲汲輸入之。而泰東文化，遂有埋沒不彰之憾。竊惟兩國今日，皆於思想問題，有岌岌可危之感。當此之時，而得博學明眼如先生者，妥爲警告批評，我等之心大爲之強也。先生蓋我等所景仰欽慕，必欲常聽其警語者，不意此回，得於臺灣迎之，欣慰何似，願此機會，詳察臺灣實況，而妥爲批評警告之，幸甚云云。次對東中將，述歡迎辭，法水督府外事課長，英譯畢，博士立操流暢英語，鄭重述謝，大義謂「余渡貴國以來，到處官民共以余爲碩學，熱誠歡迎，而實不然，余一浪人耳，然辱熱誠歡迎，足證日本國民，非徒重金力權力之國民，而崇道德思想之國民也。如今所言，日華兩國，輸入泰西文明太甚，將來如何，外國人恒言日華兩國，決不能提攜，以余思之，兩國素同文明，自得提攜而進，此其成否，可以卜兩國之將來也。物質利害，決不能真提攜，要必精神結合，即心心相印，始得提攜於久遠也。凡文明必有其表徵，余今尚垂辯，此有理由，夫中華革命，廢皇帝，易總統，然此總統不過似而非之皇帝。今日中華，分新舊兩黨，人輒以余爲新黨，決不然，以爲舊黨，亦不然，余真實之中華黨也。中華曩剪辮，此決非代表一般之希望，今日猶然，故余乃存之。外國人，屢視余爲狂人，此坐不解余真思想精神之罪也，余渡日之途，次於朝鮮，而關日本於該地之治績極佳及渡臺灣不過二三日，未由批評，但觀今夕所聚各位，披誠相待，心焉感

之，抑物質文明，日本朝鮮均有佳步。中華民國，理想太過，宜使更加發達，世之批評家，屢言日本過重物質文明，閑卻精神文明，而余則確以日本國民，為偏重精神文明者。日華兩國民真欲結合融和，捨懇切相待，別無善法。若以日本文化過於中華，而出高壓態度，決不能結合而融和也。余初娶日本婦女為妻，或告以華俗污穢，而卿何善耐也。內人答之曰衣雖襤褸，心則潔白，如著錦袍也。余實如是。初余對日本，懷抱悲觀，比訪日本，轉為樂觀也云云。言畢，法水氏譯之。最後博士操國語述謝。欣然乾杯。次東中將，亦起述謝。並談大東文化協會之使命。宴酣，紅袖歌吟，博士不覺忘形，而為引滿，九時半盡懽而散云。（《臺灣日日新報》，大正13年〔1924〕11月26日）

大正十三年十一月二十七日

辜博士縱談

辜博士（鴻銘）既駐大和行，或過訪之，博士欣然語之曰：「余原籍同安白礁，生長南洋，為學西洋，活動東洋，即東西南北人也。十三歲適福州。十四歲渡英國，肄業八年餘，研究文學；移德國，肄業二年半，研究工學。間或往來法、意，能操英、德、法、意諸國語，而作希臘、拉丁文。並會說日本、中華（北京、福州、泉州、廣東）、馬來話。日本語，從亡妻（日本人）習來，十六年前亡矣，而余已老，話亦漸忘矣。」

前清時，官至郎中。及民國，嘗為北京大學講師。會船津奉天總領事，創《華北正報》，乏人主英文稿，求之余，余以主義同，慨然應之。時都人方排日，大學生及他知友，多為余危，力諫之，余不以為然。事為該大學當事所知，而以此咎。余至是，知不見容，遂告退。小幡前公使，知余因此吃虧，憐之。該報自創立以來，經閱四年，頗見重於世，而為東洋貢獻者不少。

顧自悼前妻以來，少與日本人往來，不意此番渡日，日本舉國，盛情相待，余駭為意外。通觀其國情，中以上之人，多能自知其病，可醫治、可進步。而華人能自知其病者鮮。大抵知有己不知有人。誠能躬自厚而薄責於人，何至如今日之亂哉。現在為政者，有北派，有南派。北派如直隸，多偽君子。南派如廣東，多真小人。然前者不可依，後者則可近也。日本立國之地至危，非國人善奮，不堪設想矣。俄人之好戰，列強所憚，不意日本能折之，以保全東洋，至今中華獲免瓜分之

禍者，平心而論，日本之力也。排之者獨何心哉？渡臺以來，恆見臺人善操日語，不見日人善操臺語者，不能無惑。余有《讀易草堂集》英文八種，漢文二種。嘗英譯《學》、《庸》、《論語》，傳之西洋。漢譯希臘、羅馬、法國烈女傳，傳之中華。此行且擬暫駐也」云云。（《臺灣日日新報》，第4版。大正13年〔1924〕11月27日）

大正十三年十一月二十八日

辜博士（鴻銘）來朝，頻於內地各處，吐露講演，及蒞當地，或猶叩以此行宗旨何在？博士曰：「老生此行，有周君學淵，贈詩相送，大抵道盡吾之底蘊矣。」其詩如下：「東方有聖人，九州可太平。西方有佛教，萬類不相爭。聖人救人具，大法存六經。佛教有何用，神道治愚民。一夫得其所，堯舜之所名。仁賢為國寶，春秋為權衡。人人親與長，焉用術縱橫。中國三千年，恃此為長城。只有秦皇帝，棄德而用刑。帝業二世亡，四海不樂生。日本重儒術，佐以佛光明。黃帝之子孫，彼此無交兵。不料異端起，禹域化荆榛。豺狼厲爪牙，問我骨肉親。洪濑橫天宇，風俗失真淳。是天奪其魄，西方戰禍臻。哀哉三千萬，骨肉委荒屯。扶桑被餘厄，聞者為酸辛。天災地竟裂，人禍海無垠。凡茲因與果，由於上不仁。不仁心何滅，由于異術伸。金鐵勞萬人，不知一夫昀。區區田百畝，地平而天成。皇皇求仁義，尊為大夫耳。奈何從市兒，日夕計籌緡。富強非長策，西哲且知悛。仁義天所福，禍患自長湮。禍福如黑白，覆轍豈可循。所願豪傑士，以此書其紳。孔孟若飲食，將以育萬民。百工如衣服，缺一不為貧。君子成君子，小人安小人。名分以德辨，禮義重群倫。誰能由此道，當見民再新。辜公吾國賢，道得聖人真。悲天憫人窮，辨說尊孟荀。惜無斧柯手，將奈龜山薪。子輿昔遊梁，仲尼今入秦。焦口說仁義，鰲顏犯風塵。安得垂天雲，與此涸轍鱗。日本無唇齒，禍福彼此均。必有真英雄，為子倒冠巾。開筵吐所抱，正氣一朝申。視為一家事，且始畛域泯。同心扶綱紀，協力感人神。賤貨有父子，尚德有君臣。力田與孝弟，萬物同振振。西土殺人技，錐刀何足珍。行見黃炎裔，坐致白狄賓。大哉孔子道，萬世所宜尊。百川走東海，重星拱北辰。變器不變道。董子常諄諄。短歌為馬策。腐語不堪陳。」周君嘗仕清為道臺，學問深醇，其父名馥，原任兩江總督也云。（《臺灣日日新報》，大正13年〔1924〕11月28日・無腔笛）

大正十三年十一月二十九日

辜鴻銘氏 本社を訪ふ

二十八日午後，胃腸の病ひから幾分回復した辜鴻銘氏は，牡丹色の支那服を著て辜顯榮、陽松二氏と共に突然本社を訪問。井村社長其他と快談數刻にして辭去したが，相變らず氣焰萬丈で，早速筆を揮つて寫眞に見る如き「玉風起華夏、喜氣滿乾坤」の對句を

揮毫したが，ソレに就いて説明して曰く「華夏とは支那の事で玉風が支那に起つて喜氣が乾坤に滿つる事を自分達は願つている。然るに當今の支那は用夷變夏であつて支那も夷風に征服されつつある。昔は用夏變夷であつた。又以前は扶清滅洋であつたが，今迄の支那は扶洋滅清で

洵に歎はしい事である。此の扶清滅洋は日本の尊王攘夷であつたのだ。然るに貴國も今日では尊夷攘王の傾きがあるやうだ」杯と慷慨し，井村社長との間に本島人青年にも其種の者を出しつつあり，敬老の美風なども失はれて來た杯と時代思想に就いて物語り，尙ほ辜氏は「自分の號は讀易老人といふ。之は易に作易者其有憂患乎の

文句から取つたものだ。《讀易草堂文集》もある。最近迄の英文等の著書も相當澤山あるから歸つてから台灣へも送る」などと快活に語つた。

同頁刊辜氏「王風起華夏，喜氣滿乾坤」法書一幅。（《臺灣日日新報》，大正13年〔1924〕11月28日）

〔譯文〕

大正十三年十一月二十九日

辜鴻銘博士訪問本社

腸胃病有點兒好轉的辜鴻銘博士，二十八日下午，穿著牡丹色的中國式衣服，突然跟辜顯榮、楊松二先生一起訪問總社，暫時跟井村總經理談了片刻以後便告別了。辜博士和往常一樣氣焰萬丈，立刻大筆一揮寫了照片上那樣的對句「玉風起華夏，喜氣滿乾坤」。他自己解釋說：「華夏」就是中國。我希望在中國能刮起玉風來，喜氣充滿於乾坤。可是現代的中國用夷變夏，正在被夷風征服。以前的中國不

是這樣的，是用夏攘夷。而且以前的中國扶清滅洋，可是最近卻變成了扶洋滅清。真的令人嘆息。他慷慨地說：「此種扶清滅洋就是日本的尊王攘夷也。可是貴國（日本）最近也正在傾向於尊夷攘王。」又井村社長談及時代思想時說：「本島（臺灣）年輕人中也有這種人，敬老的美德也越來越見消失。」辜博士還快活地說：「吾自號謂讀易老人，此號就是出自《易經》中所謂：「作易者其有憂患乎。」這一文句，我還著有《讀易草堂文集》。迄今用英文寫的書也很多，所以我打算回國以後，把我寫的書送給臺灣的貴公司。」

同頁刊辜氏「王風起華夏，喜氣滿乾坤」法書一幅。（《臺灣日日新報》，大正13年〔1924〕11月28日）

大正十三年十二月一日

辜博士一席話 喜作臺灣之寓公

辜博士（鴻銘）到臺灣，島內官民，熱誠厚遇，督府且欲待以客禮，如寓鐵道大旅館，不論星期旬日之費，概擬由官支出，遣人商諸博士，博士婉謝之，博士有言曰：「余寓臺灣，如歸故鄉，吾亦一臺民矣。」博士素惡活動寫真，映畫之不善者，易於敗壞風教，蓋青年男女觀之動輒不習於善，而習於惡也。北京一洋人活動寫真館，求為題匾，博士顏之曰：「怪力亂神」。博士曰：「泰西學術固昌明矣，使余有祖龍之權力，除新舊約聖書，及一曲本（益奇斯匹），餘皆可焚燒也。然新舊約聖書，猶不及於綱常倫理。余嘗以英文，作《春秋大義》，傳之西方，以匡其未逮焉者。」

博士垂辮之故，或未詳而叩之，博士曰：余全家皆垂辮，曩北京剪辮之聲浪高時，巡警到處強制，家中一輿夫，一日為其所強逃歸，余以事知其非民意也。而奧國參贊一輿夫亦為其所強，至於辭職歸鄉，參贊詢其故，輿夫曰，余寧去食，保此辮也。後奧使以語余曰：貴國士大夫，不及一輿夫也。余聞之，一時愕然，及得其情，因敷衍轉告之曰，輿夫走卒，生計簡單，謀食容易，士大夫則不然，誰肯觀富貴如浮雲哉，不速去辮，則妻妾之奉，不可得也。麻雀之樂，不可得也。軒冕之榮，不可得也。私囊之飽，不可得也，守節云何哉。言畢，喟然者再。

博士此後講演，擬自南返，擇日為之，年中欲一回華。大東文化協會，方求博士為其研究部囑託，博士或諾，明春再渡內地，為該協會盡力也云。（《臺灣日日

新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 1 日）

大正十三年十二月二日

支那民族の弊風 要之責己求己而已

辜鴻銘

さる下午、來臺中の辜鴻銘先生を台北旅次の辜顯榮氏宅に訪ふたら、福建語で「これは私が言はんとする一部分であるが」と左の漢文の草稿を示した。

光緒十年、日本岡千仞（振衣）氏は曾て中國に遊び、《觀光紀遊》の一書を公にせり。書中氏の友人櫻泉氏の中國弊風論一節を載せありて、中土に遊べる櫻泉氏の論極めて適切なりとて曰く「中土を貴ぶ所以の者は、士大夫は名教を重じ、禮讓を尙び、志趣また

高雅にて氣象溫和

農工の如き力に食む者は、勞苦を忍び、質素に安じ、汲汲として生を營み、孜孜として産を治む。我邦の及ぶ能はざる處也。然るに學者は經藝を講ずるに百年を費し、白髮にして尙得る處なき業にいそむ。其の一旦科第（清朝の人材登用政策）を博するや、致身顯貴、財賄に耽り、身家を肥すを得れば喜び、失へば憂ふ。廉恥蕩然として國家の何物なるかを知らず。而して泰山の如き盛名を負へる名儒大家の如きも、日夜經疏を穿鑿し、謬異を講究するのみに止る。

清代の「金石」「說文」

の二學は宋明以前になき處のもの也。顧炎武、錢大昕諸家の出づるに及び、「考證」を學となして以來競うて新意出で、宋明を壓せんと務むるも、紛亂混雜その無用なる事前にも百倍す。宋儒にも少しく才氣ある者ありて詩文書畫を以て名譽を釣り、財賄を博するの具となさんとし、爲めに志喪びて身心を補ふ能はざること、恰も風の雲、月の露に似て當世に益なし。これ晉時代の儒が老莊の學を穿鑿せると相距る事幾何もあらざる也。吏たる者、奴僕を以て甘じ、婢妾の如く長上の膝に侍べるを事とし、

奉迎を風となし望

門拜塵，己を欺きて人を賣る，之を以て自ら得とせり。商賈工匠また眼中に一丁なく，貌を粧ひ價を銜ふ。斯くして粗製濫造に陥り，人財を騙取す。之を猶可とするも人理を以て論ずれば，其最下たる者は狗盜鼠竊の如き刑憲の何者なるを知らざる人物なり。そも門に立ちて憐を乞ふ者の汚穢を知らざるは何事ぞ。其の輕躁擾雜，喧呼笑罵さるるは，皆風俗頹廢して教化の行届かざるに由る。嗚呼、政教は地を掃ひて其極に至る。これ

外人の主張を侮り，

傲然として禮儀の大邦を以て自ら任じ，歐米を以て未開國なりと目するも，抑故ある也云云。斯は二十年前の語なり。猶想ひ起す，道光末年、號を松龕と云へる中丞官の徐繼畲《瀛環志略》を著せり。當時之を讀みし者は何れも彼か外國崇拜者なりとし，其非を鳴し，横より様様の訾議出でて遂に職を落すに至る。自來我が中國の士大夫は夜郎（王）自大の思想に生き，爲めに外人に譏を貽す。固より怪しむるに足らざる也。惟ふに今日

歐化を慕ふる者又

如何で前に倨りて後に恭む乎。孔子は曰く「古のもの廉を矜り今のもの忿戾を矜る」と。所謂廉なる者は己を責むるを知つて他を責めず，己に求めて人に求めざるにある而已。（完）（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 2 日）

〔譯文〕

大正十三年十二月二日

中華民族的弊風 要之責己求己而已

辜鴻銘

某天下午，爲了跟旅臺中的辜博士見面，記者拜訪了人在臺北的辜顯榮先生的住宅時，博士用福建話說：「這是我想說的一部分……」，便把以下的漢文草稿拿出來給我看。

光緒十年，日本人的岡千仞（振衣）先生到中國去遊歷，後出版了《觀光紀

遊》一書。書中引用他的朋友櫻泉先生的〈中國弊風論〉之一節，以曾遊歷中土的櫻泉先生的論述極為確切，因而曰：「所以貴中土者，士大夫重名教，尚禮讓，志趣亦高雅而氣象溫和也。如農工食力者又忍受勞苦，安於質素，汲汲營生，孜孜治產也。是我國所不能及之處也。然而學者為講經藝而費百年，勤奮至白髮仍無處得業。其一旦登科第（清朝登用人材之政策），致身顯貴，耽於蓄財，得飽私囊則喜，失則憂，廉恥蕩然而不知以國家為何物也。而且雖身負如泰山盛名之名儒大家，日夜穿鑿經疏，亦只是講究謬異而已。」

清代「金石」「說文」二學，宋明以前所無。及顧炎武、錢大昕諸家出，以「考證」為學以來，競出新意，務壓宋明理學。然其學因紛亂混雜，故於現實無用者百倍於前。宋儒之中，亦有少數有才氣之人以詩文書畫沽釣名譽，欲以之為博蓄錢財之具。以是喪志而不能補身心，宛若風前之雲、月夜之露，於當世無益。是與晉代之儒、穿鑿老莊之學者相距無有幾何也。吏者以奴僕為甘，如婢妾侍長上之膝，以奉迎為風，望門拜塵，欺己賣人，以之為自得也。商賈工匠亦眼中無一丁，妝貌銜價。故陷於粗製濫造，騙取人財。人或以之猶為可，然若以人理論，則其最下者如狗盜鼠竊，不知刑憲為何乎。夫不知立於門前乞憐者之污穢為何乎。其輕躁擾雜而遭喧呼笑罵者，皆由於風俗頹廢，教化不普及之故也。嗚呼，政教掃地而至其極焉。是侮外國人之主張，傲然以禮儀之大邦自任，以歐美為未開之國也，抑有故也云云。此乃二十年前之語也。猶想起道光末年，號稱松龕中丞官徐繼畲著有《瀛環志略》。當時讀之者，莫不以為其乃崇拜外國之人也，遂鳴其非，而種種訾議亦橫生而出。結果導致他被免職。爾來我中國的士大夫以夜郎自大的思想為主，結果導致被外國人誹謗。此亦不足怪也。蓋現在仰慕歐化者不是也如此前倨後恭乎。孔子曰：「古者矜廉，今者矜戾。」所謂廉者知責己而不責他，求己而不求人而已。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 2 日）

大正十三年十二月二日

混亂の支那を救ふは

——東洋の霸者なる日本あるのみ

汎太平洋俱樂部例會は一日午後四時から鐵道ホテルに於て開催されたが、鴻銘氏の特別講演ある事が人氣を呼んで、會員以外から傍聽を希望する者多數、同

俱樂部例會には珍しい景色で、約八十名に上り、四時三十分法水幹事開會の挨拶を述べ、新人會員後藤検査官長を紹介し、本日の講演者辜鴻銘氏を紹介した。辜鴻銘氏は臘脂の支那服に瘦軀を包み、壇上に立ち流暢な英語で太平洋の將來を説き、大體左の如く述べた。

日本の將來に關して慚からぬ危憂を感じて居た私は、今回の訪問に依つて眞實を知り、日本の將來に大きな期待を抱く樂觀的立場に變る事の出來た事を喜ばしく想ふ。今夕は世界各國の親善文化の向上を増進する目的の汎

太平洋 倶樂部の席上で私の抱負を述べる機會を與へて下された事を欣幸に思ふ、顧ふに世界の文明は東から西に向つて進み行くものである事は歴史に徴しても明らかな事である。即ち地中海沿岸に發した文明は羅馬に移り、羅馬から中歐に、次いで亞米利加の發見以來アングロサクソン人移往と共に文明は大西洋を横ぎり、米國に渡り、現今は更に一段太平洋を中心とするに至つた。而て世界のあらゆる問題は太平洋の岸に

集中し あらゆる施設計畫は太平洋を中心として居る現状である。太平洋の平和を維持し太平洋將來の發展を期する事は我我太平洋沿岸に住むものの責務である。日本及び支那は歐米の諸國と通商を開始して僅かに數十年、而も克く泰西の文明を輸入して今日の發達をなした事は同慶に堪へない。併しながら物質文明、機械文明は充份輸入して居る様であるが、形而上の文明即ち精神的文明を

盲目的 に輸入している觀がある。物質文明の進歩發達は勿論喜ぶべき事ではあるが、精神的方面、道德的方面にまで徒に泰西諸國に追隨する事は、甚だ考慮を要する事と思ふ。今我我の最も案じて居る處は、日本國體の美なる事から國體の確實なるに反し、我支那は動亂絶えず、未だに國內の統一さへ出來ない事である。我我は支那の獨立を衷心希望するものであり、日本人の公平寛大なる友情に依り對支問題の解決を期待するものである。

日本人 が支那の傳統的習慣を内容に入つて理解し、先づ對策を講じて載きたい。獨逸は爭亂絶えぬ中央亞細亞に關係してその對策を誤つた爲め滅亡したが、日本はこの意味からも重大な地位にある譯である。「高尚なる人はそれだけ責務が重い」と古くから云はれて居るが、日本の地位はその位である。私は東洋の文明と東洋の道德を主張するものであるが、排外を主張するものでない。私は或る

西洋人 に次ぎの一句を示した事がある。「私の熱烈なる希望は、最もよいも

のを結合するにある。總ての障害を破つても。」と。西洋と東洋にある最も美しい點のみを調合する事は私の理想である。日本に支那を誘導して行く責務ある事は前言の如くであるが、日本本國と支那本國は遠く隔てている。臺灣は一衣帶水なるのみならず臺灣人の多くは支那から移住したものであり、本島人の舊慣精神は

支那人と一致して居る處が多い。而して支那を知るに最も便宜な地位にある譯で、臺灣に住む皆様は對支問題解決の第一線に立たれる方方であると信ずる。私は台灣を訪ねて内臺人間が頗る親密であり、政治、教育、産業共によく進歩して居るのを觀て心強く思ふものである。日本の友誼に富む方針により、支那の獨立を助けて下され、世界列國の對支政策の模範となつて載く事を御願ひする次第である。

終つて法水外事課長これを翻譯し、茶果の餐應あつて午後六時散會した。
(《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 2 日)

〔譯文〕

大正十三年十二月二日

能救中國之混亂者只有東洋之霸者——日本而已

汎太平洋俱樂部例會從一日下午四點在鐵路飯店開始舉辦。因爲有鴻銘博士的特別演講，所以非常受歡迎，除了會員以外，希望參加旁聽者很多，高達八十名左右，這在該俱樂部的例會中，是個罕見的景況。四點三十分鐘，法水幹事發表開會致詞，介紹新人會員後藤檢查官長和今天的演講者——辜鴻銘博士。辜鴻銘博士以臙脂紅的中國傳統式衣服包裹著消瘦身軀，站在講壇上用流利的英文演說著太平洋的將來。他演說的意思大略如下。

以前我擔心日本的將來，可是這次來日本，在知道了真實以後，變成把希望寄託在日本的將來，能改變成此種樂觀立場，我個人也很高興。今天晚上能讓我有機會在以增進世界各國的親善、文化的提昇爲目的的汎太平洋俱樂部的席上，訴說自己的抱負，我覺得很欣慰和榮幸。蓋世界的文明乃從東方向西方進行者，此徵諸歷史則明也。亦即發源於地中海沿岸之文明移於羅馬，又從羅馬傳到中歐，接著在發現美洲大陸以後，隨著盎格魯撒克遜 (Anglo-Saxon) 族的移居美洲，文明也橫過大西洋而到了美國，現在更進一步地成爲以太平洋爲文明的中心。

而世界所有的問題集中於太平洋沿岸，所有的設施計畫也以太平洋為中心，此乃當今之現狀也。維持太平洋的和平，期許太平洋將來的發展，就是我們住在太平洋沿岸的人的責任。日本及中國開始跟歐美各國通商，未經數十年而能攝取泰西的文明，達到現在的發展，甚感同慶之至。但是看來似乎充分攝取物質文明、機械文明的同時，一方面卻也盲目地攝取形而上的文明，亦即精神的文明。我覺得雖然物質文明的進步發達應當是件喜事，但是於精神的方面、道德的方面也一味地追隨泰西各國的話，則不得不加以考慮。現在我們所最憂慮的事情就是：日本的國體不僅美而且確實，相反地，我中國則動亂不絕，國內統一也未能達成。我們衷心希望中國的獨立，期待依靠日本人的公平寬大的友情，解決中國的問題。我希望日本人充分了解中國的傳統習慣，趕緊研究對策。德國因為糾纏到爭亂不絕的中亞，弄錯對策，所以滅亡了。所以就這層意義而言，日本也占有重要的地位。古語有言：高尚者，其所肩負的任務亦相對重大。日本的地位正是如此。我是提倡東洋文明和東洋道德的人，並不主張排外的人。我曾經向西方人表示過以下的這句話，說：「即使不得不克服所有的障礙，我也熱烈地希望把最好的東西結合起來。」

我的理想就是調合西方與東方最美好的部分。雖然如前所述，日本肩負著誘導中國的任務，但是日本本國離中國甚遠。臺灣不但與中國一衣帶水，而且大部分的臺灣人就是從中國大陸移民過來的人。所以臺灣人的風俗與中國人很像。故要了解中國，臺灣就處於最方便的地位。我相信住在臺灣的各位，都是帶頭活躍於解決對中國之問題的第一線。我來臺灣看到住在臺灣的日本人和臺灣人頗親密，政治、教育、產業各方面都有所進步，讓我覺得更有信心。我希望日本以深情厚誼的方針幫助中國獨立，使之成為世界列國對中國之政策的模範。

最後，法水外事課長翻譯了辜博士的演講，供應茶和點心，該聚會在下午六點散會。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 2 日）

大正十三年十二月二日

辜鴻銘氏視察

目下來臺中の辜鴻銘氏は，二日午前十時臺北第三高等女學校、第一中學校を，三日は高等商業學校を參觀する筈。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 2 日）

〔譯文〕

大正十三年十二月二日

辜鴻銘博士視察

現在正在訪問臺灣的辜鴻銘博士，預定二日上午十點參觀臺北第三高等女學校、第一中學校，三日參觀高等商學校。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 2 日）

大正十三年十二月四日

辜鴻銘氏・視察日程

目下滯在中の辜鴻銘氏は四日より臺北市内の度重なる學校の視察と講演會に臨席するが、其日程は左の通りである。

四日商工學校、都府中央研究所。五日休養。六日午後醫學專門學校內臺灣教育會東洋協會聯合講演會に臨席，終つて總督府招待會へ。七日休養。八日大正協會招待會へ列席（江西樓）。九日專賣局博物館視察，十日午後十時八分臺北發南下。十一日臺南著滯在。十三日台南發鹿港へ。十六日同地發臺北歸著。十八日階行社招待會へ臨み。二十一日臺北發廈門へ。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 4 日）

〔譯文〕

大正十三年十二月四日

辜鴻銘博士・視察行程

現在正在臺灣逗留的辜鴻銘博士，預定從四日開始，視察很多所學校或是出席很多場演講會，其行程如下。

四日參觀商工學校和都府中央研究所，五日休息一天，六日下午出席附屬在醫學專門學校內的臺灣教育會和東洋協會聯合舉辦的講演會，然後出席總督府的招待會。七日，休息一天。八日，出席大正協會在江山樓的招待會。九日，視察專賣局博物館。十日，下午十點八分，從臺北出發南下。十三日，從臺南出發去鹿港。十

六日，從鹿港出發，返抵臺北。十八日，光臨階行社的招待會。二十一日，從臺北出發去廈門。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 4 日）

大正十三年十二月五日

辜氏の視察

辜鴻銘氏は四日午前十時半臺灣商工學校を訪ね，校内を視察した後同校三年生に向ひ『人間は働く爲に生れたのである。働かぬ人間は何の役にもたたないものである。諸子は將來大に働ける人間になる様，今から専心勉強して欲しい。』と諭す所あり。更に中央研究所を訪ね，加福社兩博士の案内で所内を視察し施設の完備せるを讃稱して正午辭去した。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 5 日）

〔譯文〕

大正十三年十二月五日

辜博士的視察

辜鴻銘博士，四日上午十點半，訪問臺灣商工學校，視察校內之後，向同校三年級的學生呼籲說：「人就是爲了工作而被生。不工作的人沒有什麼用。我希望你們從現在起，專心學習，將來變成能幹的人。」然後便訪問中央研究所，由加福社兩博士作嚮導，帶領博士參觀所內。辜博士稱讚所內的設備完善，在正午時告辭而去。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 5 日）

大正十三年十二月五日

辜鴻銘氏講演・醫專講堂に於て

東洋協會台灣支部及臺灣教育會の主催で，六日午後一時半から醫學專門學校講堂で目下來臺中の辜鴻銘氏『東西教育の異同』の題下に公開講演を爲し，一般の來聴を歓迎す。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 5 日）

〔譯文〕

大正十三年十二月五日

辜鴻銘博士於醫專講堂演講

由東洋協會臺灣分部及臺灣教育會主辦，從六日下午一點半開始，辜鴻銘博士就《東西教育的異同》這個題目，在醫專禮堂舉行公開演講。歡迎一般人士來聽演講。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 5 日）

大正十三年十二月七日

辜博士（鴻銘），最近連日視察市中各校，以其所感語人曰：「所觀校舍，大抵宏壯華麗，一入門牆，令人起敬。至於教授之際，師弟之間，亦見靄然。教之者誠，習之者勤，教育之發達，此可窺而知矣。唯是學課之多，漢文之少，二者皆有可斟酌處。貪多務博，學者之病也。吾嘗染之，縱何天才，不無得此失彼之憾焉。誠能擇其尤切要者，多分時間以教之，則習之者易於會心矣。顧自世界思潮澎湃以來，所以救之導之於正者唯一漢學也。蓋寓仁義道德，倫理綱常者也。此番視察，凡諸學課之中，孰先孰後，一瞥難知，但以鄙意言之，東洋文明之精粹，存於漢學，而東洋之秉政者，所以教其國民，正宜倍之於他課，而反少之甚，此其見解何在，吾百索不一得也」云云。博士之言，意味深長，可以攻玉矣。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 7 日・無腔笛）

大正十三年十二月七日

綱常名教定國論(一)

讀易老人著

予謂今日之中國，不廢共和政體，國不可一日安也。或問何以言之，予曰，昔有駐日本英使，嘗語人曰，舊日本舊時代，無二物，或問何物，曰臭蟲與律師。予亦謂舊日之中國無二物，或問何物，曰游街拉客之倡女，與奔走運動之政客是也。今政體為共和，則必設國會立議院，伴此而起者，則必有政客。政客以巨大之權利為目的，而利用有力者俾為我用，勢去則又顧而之他，實與游街之倡沿途拉客，迎新送舊，以求夜合之資者無以異。試以鼎鼎有名之政客唐紹儀言之。當革命之初，既鬻身於袁世凱矣，卒不安於室，為袁所棄，則之粵而合於岑春煊。已又被逐於

岑，則更北奔求段祺瑞納入安福俱樂部，此與游街拉客之倡何以異耶。憶辛亥冬，唐在上海投革命黨之次日，予遇之於西人處，予面責之曰：君爲大清臣子，位至二品，富有巨萬，何莫非朝廷之賜？今負恩背義，何以爲人？唐曰，君所言當矣，然此舊思想，不能行於今日。予曰行義則榮，行不義則辱，烈女不事二夫，忠臣不事二君，此天下之通義，不論古今，不分中外，不能舍是理也。夫唐與予本舊交，平時頗負志氣，至今日乃不知順逆榮辱之分，則西洋異學誤之也。近代英國路斯肯有言曰，今日我歐美學術，大凡只足以誤學者，使其全不知綱常倫理之爲何物。今唐以美質而爲異學所誤，竟比倫於倚門之倡，然較之孫文、伍廷芳、梁啟超、熊希齡輩，悍然禍天下而自以爲得計者，尙有差。蓋唐比之鄉曲少女，以性好繁華修飾，致不知賣倡爲辱，故竟墮落耳。予往在上海，見夙儒沈子培先生，問若梁啟超者，尙可再登舞臺否，沈先生曰，惡瘡遍體，誰更悅此河間婦者，即段祺瑞亦且唾棄之矣。今之論國事者。輒曰督軍害國，固已知政客之罪，更千百倍於督軍，故今日之亂源，不在督軍，而當坐此無恥背義怙利競亂，行類倡伎之政客也。故若今日無政客，雖有督軍無能爲矣。試問督軍，何以爲督軍，非今日所謂政府者，卑之耶？而今日政府之爲何物，非袁世凱當日謀篡逆之機關耶？今日之督軍，即利用此機關，內則勤捐於民，外則借債於各國，朘削國家之元氣，以自私造洋樓，擁豔妾，乘汽車，殖貨財。而所謂政客，實陰操縱之，所利又倍蓰，而國與民交病矣。簡而言之，今日之中國，政府之壟斷也；若國會若議院，則容納倡伎之女閭也；若安福俱樂部與中外報界聯歡社，則私國暗倡也；安福部則中國之暗倡也，中外報界聯歡社，則外國暗倡。若所謂民國大總統者之果居何地位，吾蓋不忍形容擬議之矣。故欲存今日之國，必先廢督軍，欲廢督軍必先斥政客。欲斥政客，必先去共和政體，而申綱常、名教。非如此，國不可一日安也。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 7 日・文苑）

大正十三年十二月七日

東西教育の異同(一)

辜鴻銘氏講演

私は今回日本内地を訪ね、到る處歓迎を受け、五箇所許りで講演を試みました。殊に當臺灣に参りまして以來、官民各方面から

非常な歡待を

受け、所所に講演をなすの機会を得た上、本日は當地に於て最も有力なる團體である臺灣教育會及び東洋協會臺灣支部の招きに應じ、諸君に見えた所、この雨天にも拘らず多數の諸賢が御出で下され、この大ホールも立錫の餘地なき盛會を呈した事は私の最も欣幸とする所である。本日の演題は『東西教育の異同』と云ふのであるが、私は諸君の貴重なる時間を貧弱な私の講演の爲めにさかれる事が氣の毒に堪へないので出来るだけ簡單明瞭に

私の意見を述

べ、この責任を終へたいと思ふ。歐州大戰亂が殘虐極まる戰跡を残して以來、思想界に一大變動を來し、惡化した思想が到る處に善良な道德を破壊して止まる所ない現状である。この混沌たる社會思想を善導する事は目下の急務であり、我我は齊しく人類の心を改造善導するの路を攻完せねばならぬ時である。而して人類の心を改造し善導するには一に教育の力に依るものであると信ずる。即ち教育は

社會の根柢を

爲すものなりと信ずるものである。支那の古い言葉に

有正學術然後有好風俗

有好風俗然後有好政治

と云ふ事がある。教育の必要なる事は今更喋喋するまでもないと思ふが、私は教育をモーラル、イデューケーション（普通教育）リベラル、イデューケーション（自由教育或は高等教育）とテクニカル或はプロフェシヨナル、イデューケーション（職業或は専門教育）の三つに分つて講演を進めたいと思ふ。羅馬帝國の滅亡後、コース蕃族の侵入に依つて歐州の文明は根柢から覆へされ、所謂暗黒時代を現出し、支那文明も亦同時代に蕃族侵入の爲め盡く破壊された。この

文化の如何に

貴きかを知らぬ蕃族の後に立つて現今の文化を築き上げたものは基督教である。基教の傳道者は基督の教「バイブル」に依つて人類の善良なる道を教へた。バイブルに依つて教へられた道德は、殘虐なる歐洲蕃族を善良な方面に導き、次

第に文化に浴し，歐洲の人人は善良純良と云ふのみならず，雅美な氣風を喜ぶに至つた。善良な路を行ふには善惡の關係を知らなければならない。而てこの善惡の關係を知らずものは道德教育である。古人は我我に文行忠信の四つの道を教へた。そして行即ち

行爲を正しく

する事は最も重要な事であると教へた。今日歐洲の戰亂より革命へ，革命より動亂と云ふ混沌たる現状をなした所以は，徒らに科學教育に重きを置き道德教育の重要である事を忘れた爲めである。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 7 日）

〔譯文〕

大正十三年十二月七日

東西教育的異同(一)

辜鴻銘博士演講

我這次訪問日本內地，到處受到歡迎，還在五個地方舉行了演講。特別是來臺灣以後，受到官民各方面的款待，有機會在各處演講，而且今天承蒙本地最有力的團體—臺灣教育會及東洋協會臺灣分部的邀請，方能認識各位。儘管下雨，仍蒙諸賢出席，客滿的情形，連這間大廳也無立錫之地，盛況空前，我的心中非常喜悅。今天我要演講的題目是〈東西教育的異同〉，爲了聆聽我拙劣的演講，花費諸位寶貴的時間，我覺得很可惜，所以我想盡量簡單明瞭地說出自己的意見，完成任務。

歐洲的戰亂留下極其殘酷的戰跡以後，招致思想上的一大變動，其惡化的思想所到之處，一直不停破壞善良的道德。善導如此混沌的社會思想，就是當前的緊急任務，現在就是我們必須同心協力，完成如何改造善導人類心靈之方式的時代。而我相信要改造善導人類之心，則必須依賴教育之力。亦即我認爲教育是爲社會之根基。中國的古語說：「有端正的學術然後才有好風俗。有好風俗然後才有好政治。」教育當然是必要的，但是我把教育分成 moral education（普通教育）、liberal education（自由教育或高等教育）、technical or professional education（職業或專門教育）這三個領域而來舉行演講。

羅馬帝國滅亡之後，因 Corsica 蕃族之侵入，歐洲的文化從根本上被推翻掉，

使得所謂的黑暗時代出現。這個時候，中國文明也因蕃族的入侵，一切都被破壞掉。在不知文化之可貴的蕃族出現以後，建設現代之文化的，就是基督教。基督教的傳教師根據基督之教誡《聖經》，而來教導人類善良之道。依據《聖經》而被傳教的道德，把殘酷的歐洲蕃族引導往善良的方向，漸漸使其蒙受文化薰陶。結果歐洲的人民不僅善良純良，而且變成有愛好雅美的風氣。如果要實行善良之道的話，必須知道善和惡的關係。而能夠教我們這個關係的，就是道德教育。古人教我們文、行、忠、信四道，其中尤以教以正行最為重要。現在歐洲所以從戰亂到革命，從革命到動亂，所以會導致如此混沌的現狀，就是因為一味地注重科學教育，忘卻了道德教育之重要性。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 7 日）

大正十三年十二月七日

辜氏講演會

東洋協會と臺灣教育會の主催にかかる辜鴻銘氏講演會は、既報の如く六日午後二時から醫專講堂で開催。晩秋の雨そぼ降る中を新舊を超越した所謂「眞の支那人」の獅子吼を聞くべく殺到する臺北の知識階級、専門學校、各中學男女學生、青年等の爲めに、流石の大講堂も満場立錐の餘地なく、講演に先だつて小視野學官の挨拶あり。辜氏は青の支那服の上に紫紅の裃を纏うて演壇に現はれ、法水外事課長を介して「東西教育の異同」の題下に歐戰以後の歐洲の混亂から説き、別項の講演を爲し、四時過散會したが聴衆千二百餘名近來稀觀の講演會であつた。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 7 日）

〔譯文〕

大正十三年十二月七日

辜博士演講會

由東洋協會和臺灣教育會主辦的辜博士演講會，誠如所報導的，六日下午兩點在醫專禮堂舉行了。爲了聆聽這場超越新舊的，所謂「真正的中國人」的警世洪鐘之演講，晩秋不顧下雨而蜂湧而至的臺北的知識分子階級、專門學校和各中學的男女學生、青年擠滿了大禮堂，使得禮堂無立錐之餘地。演講之前，首先有小野視學

官的致詞。辜博士身穿藍色的中國傳統服裝，披上紫紅色的裊而登上講壇，經由法水外事課長介紹後，就對〈東西教育的異同〉這一問題，從歐戰以後的歐洲之混亂局面，開始說起，進行一場特別的演講，演講在四點多時結束。來參加這次演講的人數，有一千二百多名，真是近來罕見的演講會。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 7 日）

大正十三年十二月八日

辜鴻銘氏・歡迎詩筵

北部漢詩人の集りとして有力な團體である臺北瀛社では，支那の學者辜鴻銘氏來臺を好機とし，七日午後二時から辜先生歡迎詩筵を江山樓に催した。集る五十餘名の詩家は，與へられた『瓶菊』（七絶豪韻二首限）の題で銘銘詩作に耽り，四時半締切，詩宗鄭永南、黃純青氏に選を委嘱して休憩した。辜氏此時來場し，一同と歡談少刻，宴に移り主人側を代表して謝汝銓氏の簡單なる歡迎の辭あり。之に對し辜氏は起ちて瀛社同人の漢學振興を賞讃して來會者を喜ばせ，西洋文明の腐敗を痛歎し大に支那固有文明の保存を叫んだ。斯くて開宴八時過盛會裏に散會したが，當日來賓中には小松吉久、尾崎秀眞、林履信の諸氏の顔も見え，出席者全部に林小眉氏より同社詩集一冊宛を寄贈した。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 8 日）

〔譯文〕

大正十三年十二月八日

歡迎辜鴻銘博士之詩筵

集合北部漢詩人之有力團體—臺北瀛社，以中國學者辜鴻銘博士來臺灣爲一良機，七日下午從二點開始，在江山樓舉行歡迎辜博士的詩筵。參加的五十餘名詩人，就「瓶菊」（限七絶豪韻二首）這一規定的題目，各自埋頭作詩，直到四點半才結束。接著委託鄭永南、黃純青兩老師挑選，然後詩筵才休息。就在這個時候，辜博士來到會場，和大家暢談片刻之後，宴會便開始，代表主辦單位的謝汝銓老師，簡單地致歡迎之詞。與謝汝銓老師相呼應，辜博士站起來稱讚瀛社同仁振興漢

學，使與會者相當高興。博士爲西洋文明的腐敗甚爲悲嘆，提倡保持中國固有的文明。就這樣，宴會開得很隆重，於八點多散會。當天來賓當中也有小松吉久、尾崎秀眞、林履信諸位，林小眉先生把臺北瀛社出版的一本詩集，贈給全部與會人員。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 8 日）

大正十三年十二月八日

東西教育の異同(二)

辜鴻銘氏講演

羅馬帝國の滅亡後，歐洲は文學や美術を失つたのであつたが，暗黒時代を経て基敎の道德教育に依り，再び文學、哲學、藝術等が旺んに起り，ここに新らしい

一種の教育法

が行はれた。この教育法はここに云ふリベラル・イデュケーション自由教育である。自由教育は普通教育を卒へたものに對し，更に哲學、文學、政治學、法理學等に分ち高等教育を施し，その學術を修得したるものにマスターオブ・アーツの學位を與へる事にした。このリベラル・イデュケーションが歐洲の人人を非常に進歩させ人類の美しい點を恵み與へさしたのである。當時の自由教育はあたかも支那の儒學に相當するものであつたと思ふ。

儒學とは字に

示す通り人の需む學問である。人間としての學問である。英國のヒューマニティーは支那の儒に相當するもので，リベラル，イデュケーションも亦ヒューマニティーを本義としたものであつた。次いで最近過去五十年間は自由教育と云ひながら，専門教育職業教育が旺んに行はれて道德教育は閑卻される様になつた。その結果種種色々な學者，専門家を出した反面グ・ウードマン善良なる人を出す事がなかつた。そして徒らに機械的人間を出した結果

思想は惡化し

社會主義や共產主義、無政府主義が行はれ，各箇箇の色彩が濃厚になつた結果は種種の閥を生み，政治も官僚の一部の人人のものとなり，社會的な善良な

人、紳士は次第に減じて來た。以上は泰西教育の大略を申述べたのであるが、更に東洋の教育、支那を主とした東洋の教育に就いて申述べたいと思ふ。支那の教育は漢朝時代に於て道德教育を主眼とし、人間はその行爲を正しくせねばならぬと主張し、唐朝時代には文藝教育に重きを置き、宋朝時代には

嚴格過ぎる程

の道德教育を施した。その後時勢の進歩につれ教育方針にも變化あつて、今日では歐米諸國同様専門教育が行はれ、試験に依つて職を得る状態になり、一方に偏した職業教育が喜ばれて漸く専門教育の弊害を見るに至つた。即ち今日の學生は孔孟の教へも機械的に學んだだけであつて、眞實の心を捕へる事がなかつた爲め、受けた學問は形成の學問に過ぎず、今日の弊害を生むに至つたのである。西洋の教育は前にも述べた通り、既に第三段の職業教育専門教育が行はれて居り、

日本も亦略同様

と見られる、歐米諸國や日本にも設備の整ふ専門學校や堂堂たる大學があつて夫々専門の教育を施して居るが、支那には未だその種の専門學校は甚だ少ない。而して支那では或る商賣をしようとするものは直ちにその商賣に入つて知るのである。然るに支那人中には世界到處に活躍して豊からぬ利益を得て居る様に思ふが、専門の職業教育を受けた歐米人、日本人は別として、教育を受けなかつた支那人に抜んでる事出來ず、その活動を比較して

何等相違ない

ものと見られる。果して然らば専門の教育を受けた人人の面目は何處にあるのでせうか。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 8 日）

〔譯文〕

大正十三年十二月八日

東西教育的異同(二)

辜鴻銘博士演講

雖然羅馬帝國滅亡之後，歐洲把文學、美術等等都喪失掉了，但是經過黑暗時

代之後，依據基督教的道德教育，文學、哲學、藝術等等都再度興盛了起來。於是新的教育方式便被實施。這種教育方式就是所謂的 liberal education（自由教育）。所謂自由教育，相對於修完普通教育的課程，更分成哲學、文學、政治學、法理學等等的專業，而施予高等教育，授與學好各領域專業學術的人 Master of Arts 的學位，這種 liberal education，就是使歐洲人民進步神速，給與人類之美好部分的教育。我覺得當時的自由教育，正相當於中國的儒學。「儒學」一詞就如其字，指的就是人類所需的學問，是人類之學問也。英國的 humanity 相當於中國的儒，liberal education 本來也是以 humanity 為其本義。後來最近五十年之間，雖然將之稱為自由教育，其實卻是積極地實施專業教育、職業教育，以至於忽視了道德教育。雖然結果也出現了各式各樣的學者、專家，但是並沒有出現 good man 這樣善良的人。而且因為只是出現一些機械式人類，結果思想惡化，社會主義、共產主義或無政府主義蔓延，各自的特色越來越強烈，結果產生了種種的派系，政治變成一部分官僚的私有物。終於導致社會的善良人士越來越少。以上我所說的，就是泰西教育的大略。接著我想講東洋的教育，尤其是以中國為主的東洋教育。

中國的教育，在漢代的時候，以道德教育為主，提倡人應該端正行為。唐代的時候則著重於文藝教育，宋代所施行的教育則太過嚴格。其後隨著時勢的進步，教育方針也有了改變，到了現代，便實施跟歐美一樣的專業教育，變成了依照考試而來決定職業的情況。結果只喜歡偏於一方的職業教育，終於漸漸也發現了專業教育的弊病。亦即，現代的學生只是機械式地學習孔孟之教誨而已，不能理解其中真實的意義，所以他們所受的學問，只不過是一種形式的學問而已，所以才會產生現今的弊病。西洋的教育，如上所述，現在已經實施到第三的職業教育、專業教育，看樣子，日本的情況大概也是一樣。在歐美各國或日本，也有設備齊全的專業學校或富麗堂皇的大學，各自都在實施專業教育。可是在中國，這種專業學校非常少。所以在中國如果想要做什麼生意的話，只要直接進入那個行業，就可以學會那個生意的方法。然而我覺得有的中國人在世界上到處活躍，而且賺到不少的錢，那些受了專業職業教育的歐美人、日本人姑且不論，並不能超越沒有學過職業教育的中國人，將其活動加以比較，看來在商業上並沒有什麼不同。那麼受專業教育的人，其優點到底又在哪裏？（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 8 日）

大正十三年十二月八日

辜博士氏講演會

臺灣教育會東洋學會共主催

臺灣教育會與東京協會，既如所報，去初六日午後二時起，於醫專學校講堂，主催講演會。過午後聽眾不分內臺人、外國人男婦有識者，次第出席，至一時餘，早已擁擠不開，不二時，博士偕辜顯榮氏，及兩會執事臨之，小野視學官乃登壇述開會辭，並將博士一生經歷，周詳紹介，於是博士以英語講演，題為「東西教育之異同」，滔滔數千言，條暢抑揚，直至三時半始畢。先就西洋古代，以現代教育之得失，與其文明之隆替，而論中華漢唐宋之教化，相與比較。末就來朝之後，觀內地臺灣教育之現狀，批評短長，引《大學》明德新民之語，力勸教育方針，切宜乘時改變，極於職業教育、專門教育，更進以紳士教育、成人教育，庶可以復東洋之文明而善導國民之思想。法水外事課長，一一譯之，既而代表主催者，以英語鄭重述謝，還於樓上少憩，四時頃歸大何行寓所云。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 8 日）

大正十三年十二月八日

辜博士講演

大正協會。本日午候五時延辜鴻銘博士講演後，設筵招待。希望會員多數出席。會員以外參加者，甚為歡迎。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 8 日）

大正十三年十二月九日

綱常名教定國論(二)

讀易老人著

客聞吾言曰，君所言誠當矣，但今日西洋各國，言政治但論利害，而不論綱常倫理。予曰，無綱常無教之政，必至於無政。前謂舊日本無律師，舊中國無政客，因舊日本舊中國有名教也。國家禁民為非，不恃律師之法律而恃有君子之道也，（在日本，為武士道）。至立國行政，非恃政客所訂之憲法而恃聖人之名教之大

綱。何謂名教之大綱？則孔子春秋大義是也。此大義即中國與日本之真憲法，我東方文明之根本也。袁世凱者，萬代不可赦之罪人也。以政客欺百姓惑人心，以叛兵脅朝廷讓國位，於是春秋大義亡。夫春秋大義者，我中國及日本人人知之。西人若欲明此義者，蓋即西人政治家所謂正統之說，即我中國所謂名分大義也。夫欲治今日之中國，名分不正則令不行。而所謂名分正者，譬女子之爲適室者，雖庸弱無威嚴，但恃其名分正，位乎內，家人臧獲，靡弗敬謹受命。一家然，一國亦然。譬之美國之共和，其總統眞由民間選舉，故名分亦不得謂之不正，名分正故號令行。今之中國號令何以不行？因袁世凱以篡逆得之，名分出於盜竊故也。自袁以後，以僞承僞，名分仍不正。何以言之？總統之選舉非出眞正之民意，乃合政客與督軍，以詐力賺得之者。西友聞而詰予曰，今之中國總統之選舉固非正矣，姑且須之，異日固可得眞正民意所選舉之總統也。予曰此即過激派之思想，虛懸一異日之天堂，而民間固日日罹於鋒刃，中國待將來之眞正憲法、眞正共和、眞正總統，譬如河清之難俟。僕固任大學教授者也，今且三月不得脩金，欲俟眞共和之時代，僕之爲餓殍蓋已久矣。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 9 日・文苑）

大正十三年十二月十日

綱常名教定國論(三)

讀易老人著

僕憶光緒戊戌，日本伊藤侯遊中國。僕與侯言日本開國會及憲政事，侯謂彼國之所以決行國會與憲政者，蓋鑑於相臣之結黨攬權。予曰，固也。然有國會之後，必產出政客以擾國。已而政客果蜂起，伊藤侯乃苦志以圖挽救，設政友會，冀化野心不合正軌之政客，而爲公忠體國之政治家。僕不知其效之何如，然日本政客終不能爲害於國家者，蓋恃日皇有正大之名分故也。試觀邇者日本議院之爭固甚烈矣，政府乃得而解散之何也？名分正也。邇者中國之戰，總統下令止兵，兵不可得而止何也？名分不正也。由此可見名分之正不正，其關係如此之巨也。今日日本天皇陛下年號爲大正，蓋正一己以正天下，有深意存焉。袁世凱之僭號曰洪憲，僕謂其年號當曰大歪。蓋以不正率天下而陷天下於禍亂也。僕嘗與東友言，貴國全國之國民應本大正年號二字，顧名思義，知日本所以立國之道，本我東方數千年來祖宗遺傳之綱常名教，更當念同文同種之義，推廣此旨，以與我國人士共維持此綱常名教，以申春秋大義於天下，俾亂臣賊子絕跡於天下，攘示標範於世界各國，此固我兩國

人士之大任也。僕於庚子後著《尊王篇》，其言曰，日本之與中國唇齒相依，更切於他國，日本若果本東方之大義，以與我國相周旋，以爲各國表率，彼世界各國亦當相率而黜武力、崇正義。若用西人之眼光以視我國，則率不能得我之真相，交誼日齟齬，必不能得善果也。噫！須知日本今日之所以能立國者，而不受侵侮於外人者，蓋由於維新之初士大夫能明尊王攘夷之大義也。夷者非黃種白種之謂，忘恩悖義之人如今日優娼政客、不知綱常之武人是也。優娼之政客，即孔子所謂亂臣；不知綱常之武人，即孔子所謂賊子。二者不去，不僅東方不安，環球亦無寧日矣。故孟子曰：孔子《春秋》成，而亂臣賊子懼。（完）（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 10 日・文苑）

大正十三年十二月十日

東西教育の異同(三)

辜鴻銘氏講演

前述の様に現代に於ては已に泰西の専門教育職業教育即ちテクニカル・オア・プロフェッショナルイデューケーションは異状な進歩を示して尠なからぬ弊害をさへ見る状況に至つて居るが

職業専門教育

をこの上奨励する必要があるか否かは將來の教育根本方針を定める至大問題であらねばならぬ。私は世界各國の教育現況を見る時，斷然としてこれ以上専門教育の必要を認めない。そして將來は文藝教育を盛んにして雅趣に富む善良な人間を養成する事が目下の急務であると主張するものである。私は幼年の頃から歐洲に教育を受け，歐米の教育に關しても相等の識見あるものと

自ら信ずる者

であるが，私は今回朝鮮から日本内地を訪ね，今又臺灣に渡つて到る處各學校を訪問し，施設その他を視察して來たが，校舎の堂堂たる施設の完備し居るには何回となく驚嘆したる次第である。而して歐米にも勝る専門教育、職業教育が遺憾なく行はれて居るのを見た時，私は専門教育以外により以上の文學教育の必要に迫られて居る事實を認めない譯に行かなかつた。例へば一専門學校

或は一大學を

見る外、専門教育、而も全く一部門に入つた専門教育の行はれて、何等の文藝教育の行はれて居ない事を知るのであつた。先日當地の中央研究所を訪ね、色々な研究を拜見拜聴して多くの造詣深い學者専門家が夫々専門の研究をなされ、社會に貢獻せる事を知つて非常に喜ばしく思ふたのであるが、白蟻の豫防、毒蛇或蛇毒等の研究のみに没頭する人人で社會が構成された時を想像すると自ら寒心を覺えた次第である。好んで憎まれ口を云ふ様であるが

私は私の主義

に終始する學者である以上、止むを得ない事で、私の頑固者に見える事も亦同様の理由からである。この事を了となされて若し私の申す人格を作る文藝教育の必要を認められ、文藝教育を行はれるならば、敢てその範を泰西の文藝に求めなくとも、日本或は支那にはより崇高なる多くの文藝を有して居るのであるから、東洋人は東洋に築き残された文藝に依つて最も崇高なる人格を作られる事を主張するものである。支那の文化で最も誇りとするものは

孔子の教である。

孔子の教へに大學と云ふ崇高な著書があるか、その中に明於徳、新於民、止於至善の語がある。これこそ東洋教育の根本方針を示すものと信ずる。私はこの教育法に依つて東洋のみならず、歐米諸國にまで東洋文藝による文藝教育を盛んにしたいと思ふ。(完)(《臺灣日日新報》，大正13年〔1924〕12月10日)

〔譯文〕

大正十三年十二月十日

東西教育的異同(三)

辜鴻銘博士演講

如上所述、現代西方的專業教育、職業教育、亦即 technical or professional education 已經達到了非凡地進步。但是在另一方面、卻也產生了不少的弊病、因此是否有必要再獎勵職業專門教育、這在決定將來的教育根本方針時、是個極大的

問題。我在觀察世界各國的教育現狀時，斷然覺得專業教育的必要性，在這之上沒有再強調的必要。

我提倡將來要以大力推動文藝教育，並且培養頗富雅趣的善良人民爲目前的教育急務。我從小受歐洲的教育，所以關於歐洲的教育，自信頗有見解。這次我從朝鮮訪問日本內地，現在又來臺灣到處訪問學校，視察設施及其他，我看到學校硬體設施富麗堂皇，設備齊全的樣子，好幾次都吃了一驚。而當我看到那些勝過歐美的專業教育、職業教育被完完全全地實施的時候，我不得不認爲除了專業教育以外，我們更迫切地需要文學教育的這一個事實。比如說在看到一所專業學校或一所大學時，就可以知道除了專業教育，而且是完全屬於某一部門的專業教育以外，什麼文藝教育一點都沒有被實施。前幾天我訪問當地的中央研究所，視察各式各樣的研究，知道很多造詣很深的學者、專家各自在研究自己的專業，對社會做出貢獻，我覺得非常高興。可是當我想像到社會只是由這些埋頭研究預防白蟻、毒蛇或蛇毒而已的人們所構成的時候，我自然覺得害怕。也許各位會覺得我好像只願意說些討厭的話，可是既然我是一位堅持自己主張的學者，這也是不得已的事情。我看起來好像很頑固的樣子，也是由於同樣的理由。如果各位了解這件事情，承認爲了培養人格的文藝教育之必要性，實施文藝教育的話，就不必以泰西的文藝爲模範。因爲在日本或中國本來就有很多更高尚的文藝。我提倡東方人應該依據遺留在東方的文藝來培養崇高的人格。中國的文化中，最值得誇耀的就是孔子的教誨。孔子的教誨裏面有一本高尚的書，叫作《大學》。這本書裏面有「明明德，新民，止於至善」之語。我堅信這就是指示東洋教育的根本方針。我想依據這個教育方法，不但在東洋，連在歐美各國，也可以用東洋文藝來大力推動文藝教育。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 10 日）

大正十三年十二月十一日

歡送辜博士

張我軍（一郎）

喧囂頗久的辜鴻銘博士，已踏入臺灣之地了。各界的歡迎的熱烈，真是近來不常見的！——特殊階級的歡迎不消說，就是官界也十分地表示歡迎之意。臺灣的三新聞也齊聲歡迎其來臺。呵！歡迎的人也算出不少了。不，寧可說太多了太熱狂了。我生怕那老受不慣這樣的熱狂的歡迎，以致惹出病來，設或不幸，又因病而不

得不把一堆老骨骸埋在此異地他鄉，那就太可憐了！因此，我反而欲把一服「清涼解瘟散」來致敬於大賢之前，這大概也是這位辜老博士所喜歡容納的罷。

辜君的學識如何，我們因為沒有看過他的名著，所以不便遽加批評。但是他的思想的腐敗陳朽，在中國老早就有定評了，所以也不用我來批評。然而他這次的渡日、渡臺，說是帶了一種使命，是欲在日本、臺灣，提倡東洋文明，鼓吹東洋精神。提倡東洋文明，鼓吹東洋精神，反過來說，便是要排斥西洋的精神、西洋的文明。而這層是我們所以不滿意他的。

我們雖不可無條件容納西洋的精神或文明，但也不當固守著東洋的精神或文明來頑拒他。須知世間事沒有絕對的好，也沒有絕對的壞。東洋文明有東洋文明的好處，而西洋文明也自有他的好處。我們處在今日之時世，當取長補短，不該拘執一方，以致得此失彼，得彼失此，誤己誤人，誤了社會。況從今日的社會看去，東洋文明的缺點比比皆是，而其不合現代人的生活，也是衆人所公認而且痛感著的。日本之所以有今日者，——躍而為三大強國之一——，與其說是東洋文明之力，倒不如說是東西文明之合力。與其說是東西文明之合力，倒不如說是西洋文明之力。這絕不是我一個人的獨斷，乃世人所公認的。凡是有良心的日本人，那一個敢不承認伯爾利卿是日本國的恩人。假使當時明治大帝固守著從來的鎖國主義，而沒有傳入西洋的文明到日本來，那末，現在的日本，怕也和現在的中國相去不遠了。這不但政治如此，學術上、實業上，也都是如此。

然而偏偏有一班沒廉恥的東洋學者，硬要張冠李戴，把這段功勞欲盡歸於東洋文明的身上去。我們這位老博士就是其中一人。不然，怎的他一踏入日本之土，便連聲的說東洋文明之粹盡集在日本，而日本人才是真正的中國人。這話至少可以來證明他的意思是說：日本人有今日之強盛，是因為存著東洋文明所致的，而中國所以有今日之弱，是因為沒有存著東洋文明。雖然我們也承認日本還保存著東洋文明的一部（就是中國也保存著一部），但日本之所以能致今日之強盛，決非東洋文明之力，這是如前面所說的，可是一班愚頑的東洋文明信者，卻喜得甚麼似的，不能回顧事實如何，便大歡迎而特歡迎他，而許多頑劣的言論機關，還替他大吹牛皮，這正如梁啟超，一聽見西洋人研究東洋文化，便喜得眉舞眼笑似的。

夠了！受夠了！我們臺灣已用不著你來鼓吹東洋文明，提倡東洋精神了。我們臺灣的東洋精神、東洋文明，是嫌其太多不嫌其太少呵！辜老先生，你還不覺悟東洋文明或精神之不合現代人的生活麼？你還不承認東洋文明或精神，誤了中國麼？

要記得！輸入西洋文明太遲的中國，是被東洋文明弄壞了的，而且連你本身也被牠弄得無可容身之地，如此你還想不夠嗎？你還想帶牠來弄壞日本、弄壞臺灣嗎？

辜鴻銘博士，咱們說句誠實話罷：我願請一陣東南風，送你一帆風順，歸到中國去！

然若辜君此行，沒有帶什麼使命，但欲逛逛而已，那末我就不欲多嘴了。一一、二三日（《臺灣民報》第2卷26號，大正13年〔1924〕12月11日）

大正十三年十二月十一日

空望復辟之辜老博士

華罪魁投稿

辜博士鴻銘先生，吾不知其何許人也，據臺報所載乃屬閩泉之同安人，其為中國黃帝之子孫可無疑矣。自祖父時遷居海外，先生曾畢業於檳榔嶼大學，現年六十有八，在三十餘歲時歸來中國，當光緒帝蒙塵西安，嘗著尊王之篇以鳴其不平。在中國英文萌芽之際，亦曾投過幾篇英文於上海泰晤士報。而當時之中國能操英文，作英文者不啻如麟角鳳毛。而物稀為貴，故得西后之宣召，賜以進士出身。更於復辟時，擢為幾日之右侍郎。由此一端，而對於滿清間，則有君臣之關係焉。其所把忠君主義、亦從此而始矣。進士之名號，右侍郎之頭銜，雖非絞精血以換來，亦屬磕頭唱喏而償得，實非易易也。其鼎鼎博士之名號，吾尚未知博於何科。文學歟、政治歟，其亦經濟動植歟，視臺報之所云，乃屬文學大家，其為文學博士耶也。

當中國文學未改革之先，曾充北大之教授以混飯，及文學改革之際，不知因何之故，則不能見容，諒因其頭腦之昏、思想之舊，有以致之，不然，何以無所見聞，而潛蹤匿跡，作一種古董品，陳列博物院，以供人之參觀而已乎。此次為東都人士之招，挂帆應召，至東都後，欲探訪其大名鼎鼎之宗先生，亦由其大名之宗先生所請，故復來臺。其來臺也，說有具大造於臺人，要作臺人思想之先導。而臺人亦渴望其有以教之導之，吾不知其將欲何以以教之而導之也。若以其之思想以教導之，而其思想已陳朽不堪用矣，若以東亞文明以教導之，而東亞固有之文明，吾等已知之深，而識之熟矣，何用其導為。此次之來，莫作先導自居，只求領略臺地之風光，與宗先生之奉敬可也。其有不然，必欲見賜，請將自身之經過歷史與所主張，公諸我臺，以作我輩之照鑑。先生頭腦之新舊與思想之高劣，吾雖未深知，但在將來臺時，對人一篇之談論，而頭腦與思想全盤托出，佈在字裏行間，印入吾輩

腦袋，則知其為十六世紀之陳物矣。使我一見之，而滿身麻木，再讀之則欲嘔，其中有謂「欲統一中國必須武力，吳子玉之失敗，宣統帝之放逐，雖屬遺憾，然必有反對之運動，而促成復辟之成功也」云云。其出此言也，欺人乎，自欺乎，亦奉承人意，而博人家之歡喜乎，抑為滿清之感情，而難於放置乎，天下不乏明眼人，天下少此聾瞶輩。其津津之談者，非病神經，亦屬囁語，吾本欲無言，吾又不得不無言，名為博士，而腦根之骯髒竟至於斯，行過中西而思想之昏昧，及乎如此，嗚乎博士，枉讀若許書。

當今時勢之趨向，日新月異，一日千里，若不之知者固可言也。其為中國人、中國之內容、中國人民之志向，豈亦不之悉也，在今日之中國，復辟可能再現，武力尚可期於成功與否，雖在中國之婦孺，已知其一二，何況為大名鼎鼎之博士乎。其發此言也，不過為其受知遇之恩，以圖一報，而盡功狗責任之夢想耳，其所說，一篇之論調，乃夢想中之囁語而已。雖其忠君之志，之死靡他，可謂堅矣，而力不足何，雖有此之主張，而人民不悅服何。嗚呼井生、嗚呼博士，氣衰年老，日暮途窮，同志已虛，良多遺憾矣。吾不得不為之悲，吾又不得不為之惜。嗚呼文襄不作，張勳已亡，舉目中原有誰知你，素懷已矣，聊發囁語而消愁，忠心難忘，姑留辮尾以表志，嗚呼可憐矣哉。今幸觀光上國，來我臺灣，受官紳之奉迎，邀參神社，得三新聞之讚美，大載特登，值得矣十六世紀之先生，榮幸哉亡清之老博士。望勿以思想先導而自居，污我臺灣之人腦，而暴露中國之穢聞，臺灣幸甚，而中國亦幸甚矣。而其塚中骷髏，穢惡萬千，絕己媚人，誰也可鄙，既是黃帝之孫子，中國之人民，而懇懇勤勤，思行背德以求榮，病狂傷心，誰為之過。

若其抱有忠君之果志，當早殉清室以俱亡，不可留跡人間，希冀復辟之有日，而享榮福，倘或貪生怕死，亦宜入山披髮，了你殘年，有何面目，見彼中華黃帝之孫子，已矣已矣，吾將無言，吾等亦不願你思想之見賜，吾臺灣暮氣將已燠天，若再賜你老氣之些須，則恐暗不見日矣，你思想之善導，其指歸地非夜叉之國，即閻羅之宮，多謝多謝，望勿費神。吾等當敬敬恭恭，奉認你為埃及之金字塔，案頭之玉觀音，書籍中之古字典，抽屜內之陳曆日，以供吾等之玩瞻，而作吾等之參考而已。

罪魁亦黃帝之子孫，寄居海外，不聞問中國事者，已有十餘年之久矣。此回在報上，閱及辜博士之論調，不能已於欲言，故作是篇，以抒我胸中之積惡。（華罪魁附識）（《臺灣民報》第2卷26號，大正13年〔1924〕12月11日）

大正十三年十二月十三日

辜氏視察

目下視察南部之辜鴻銘氏，定本日下午抵臺中。該市主催請氏開一場講演，然氏因跋涉疲勞，其諾否不明。若得其承諾，決是日下午四時，在公會堂開講演會。又是夜香園閣，開臺中懇話會，並擬招待辜氏云。（《臺灣日日新報》，大正十三年〔1924〕12月13日）

大正十三年十二月十三日

辜氏臺中講演・懇話會の招宴

目下南部視察中の辜鴻銘氏は，十三日午後來中に付き來著の上市主催にて一場の講演を乞ふべく希望するも，氏は疲勞大なる故を以てその諾否尙不明であるが，若し幸に承諾を得れば同日午後四時頃から公會堂で講演會を開く事となるべく，尙同夜香園閣に臺中懇話會を開催して氏を招待する筈である。（《臺灣日日新報》，大正13年〔1924〕12月13日）

〔譯文〕

大正十三年十二月十三日

辜博士臺中演講・座談會之招待宴會

現在正在視察臺灣南部的辜博士，預定十三日下午到達臺中。臺中市打算由市府主辦邀請辜博士作一場演講，可是因爲辜博士很累，所以現在不知道博士答應與否。如果幸運地辜博士答應的話，預定該日下午從四點左右開始，在公會堂舉行演講會，還有該日晚上，會在香園閣舉辦臺中座談會，來招待辜博士。（《臺灣日日新報》，大正13年〔1924〕12月13日）

大正十三年十二月十四日

辜博士蒞南

中華碩儒辜鴻銘博士，去十一朝蒞南，官民多數出迎。下車後赴黃欣氏宅小憩，旋驅自動車，訪問各方面，正午臨公會堂官民歡迎會，會散歸黃氏宅。晚七時，應臺灣彰聖會請，在公會堂開講演會。先由津田氏述開會辭，次博士登壇，以流暢英語，就道德教育必要之題，講演多時，引古證今，深中肯綮。第二中學竹田教諭通譯，極為詳切，是夜聽眾，無慮四千餘人。越日黃氏，導游市內各處名勝，古跡學校，到處人民爭觀風采。邦人士託黃氏求揮毫者甚多，黃氏皆婉言辭卻。昨日赴中部云。（《臺灣日日新報》，大正 13 年〔1924〕12 月 14 日・赤崁特訊）

大正十四年一月一日

民國碩學辜鴻銘氏來臺

中華民國の碩學辜鴻銘氏は、日本に來遊の歸途，大東文化協會の東中將と相伴うて舊冬十一月二十五日來臺した。氏は彼南に生れ，幼時英國に遊び，グラママー、スクールより進みてエジンバラ大學の業を卒り，歸國の後支那の經籍を究め學東西に互り，十餘の國語を話し，曾て張之洞の秘書となり，又た教師、記者として其の生涯の大部分を過ごした。當年六十八歳の新人で，來臺各所に講演を爲し盛んに精神的東洋文化を鼓吹したが，東洋協會支部及臺灣教育會主催講演會では別項の長廣告を振り，又翁は頻りに日支親善を高唱し，又た臺灣の樂土たるを稱へた。淹留三旬全島を周遊したが，精神的に何物かを此の島に寄與したに違ひない。（《臺灣時報》第 63 號，大正 14 年〔1925〕1 月 1 日）

〔譯文〕

大正十四年一月一日

民國之碩學・辜鴻銘博士來臺灣

中華民國的碩學辜鴻銘博士，在參觀日本的歸途，去年冬天十一月二十五日帶領大東文化協會的東中將來臺灣。

博士在檳榔嶼出生，小時候在英國念書，學完 grammar school，畢業於愛丁堡大學，回國以後研究中國的經籍，其學涉及東西，會說十餘國語言，曾經擔任過張之洞的秘書，又以教師或記者為職，度過其大半的人生。博士今年六十八歲，來

臺灣到處舉行演講，大力提倡東洋的精神文化，由東洋協會分部及臺灣教育會所主辦的演講會上，發表長篇大論地雄辯滔滔，再三提倡日中親善，又稱讚地說臺灣就是樂土。淹留三旬，周遊臺灣全島。我相信辜博士一定會寄與這個島某種精神之物。

大正十四年一月十五日

辜鴻銘先生此次東遊，頗有演講，而其論斷，多中肯綮，如引「學而不思則罔，思而不學則殆」二語，謂今之舊學者，大都學而不思，而新學者則又思而不學。又曰：「大學之道，在明明德，在親民，在止於至善」，可為治國平天下之本，施之古今而不悖者也。

先生受大東文化協會之聘，將以明春再來，吾願先生抒其學識，振其精神，以發揮東洋文化之特色。（棠）（《臺灣詩薈》第14號，大正14年〔1925〕1月15日，頁60・餘墨）

民國四十一年八月十三日

辜鴻銘來台瑣聞

文瀾

「辮髮忠猶寄，齊眉□竟虛，還將尊王論，遍布海東隅。」這首詩是某氏於辜鴻銘來臺往訪時的口占。辜鴻銘是清末的碩儒，幼時遊學英、法、德、奧諸國。精研經訓，篤信孔孟之道。著有《讀易草堂文集》、《幕府紀聞》等書，又將《春秋大義》、《中庸》、《論語》譯成西文傳播國外。他的語文天才，不特為國人所欽佩，尤見重於西人。

他於民國十三年十二月，以六十八歲高齡，應日人之聘，赴日轉途來臺。他這次來臺，比章太炎遲了二十四年，又比梁啟超遲了十四年，而日人竊據臺灣，已歷三十一年了。當時，臺人對日的武力抗爭，雖然終息了，可是受了第一次世界大戰的影響，「民族自主」的政治思想，已開始萌芽，而且受了「五四運動」成功的刺激，在寂靜的毫無聲息的臺灣文學界，所謂「新舊文學之爭」，正鬧得天昏地暗。就在這時候，他不遠千里拖著辮子迢迢而來，此行是否帶有什麼政治使命，筆者不大明白，也不敢妄自揣測！可是，可以說他這一次的來臺，的確比章太炎、梁啟超更重大地引起了臺人的注目。

他於各地舉行演講，宣傳「孔孟之道」，受了臺灣人士熱烈的歡迎，也受了激烈的排斥。當時連雅堂於《臺灣詩薈》爲文盛讚說：「辜鴻銘先生此次來遊，頗有講演，而其論斷，多中肯綮。如引『學而不思則罔，思而不學則殆』二語，謂今之舊學者，大都學而不思，而新學者則又思而不學。」又曰：「大學之道，在明明德，在親民，在止於至善。可爲治國平天下之本。施之古今而不悖者也。」

反之，有一部份青年則在《臺灣民報》發表長篇宏論，加以排擊，有化名華罪魁，作〈空望復辟之辜博士〉一文，駁說：「其來臺也，說其大有造於臺人，要作臺人思想之先導，而臺人亦渴望其有以教之導之，吾不知其將何以教之導之也。若以其思想以教導之，而其思想已陳腐不堪用矣。若以其東亞文明以導之，而東亞固有之文明，吾等已知之深，而識之熟矣，何用其導爲？」又對他來臺談話中說：「欲統一中國必須武力，吳子玉之失敗，宣統帝之放逐，雖屬遺憾，然必有反對之運動，而促復辟之成功也。」更無情地予以痛斥說：「其爲中國人，中國之內容，中國人民之志向，豈亦不之識耶？在今日之中國，復辟可能再現，武力尙可期於成功與否？雖在中國之婦孺，亦已知其一二，……何況爲大名鼎鼎之博士乎？其發此言……乃夢想中之囁語耳。」

還有署名一郎作〈歡迎辜博士〉一文，舉日本爲例說：日本以一種蕞爾小國，躋至世界三強之一，實得力於「西洋文明」，而罵一班東洋學者，混淆事實，歸功於「東洋文明」，說：「這位老博士，就是此中一人。不然，怎得一踏入日本之土，便連聲的說，東洋文明之粹，盡集在日本，而日本人才是真正的中國人？這話至少可以來證明他的意思，是說：日本有今日之盛況，是存著東洋文明所致的。」並排斥臺灣士紳說：「可是一般愚頑的東洋文明信仰者，卻喜歡得什麼似的不能回顧事實，便大歡迎而特歡迎他，而許多頑劣的言論機關，還替他大吹牛皮……。」

辜氏離臺後，曾說要再來臺一次，但是終他去世爲止並未實現。（《中央日報》第6版，民國41年〔1952〕8月13日）